



Title	ユーラシアの諸言語におけるクロテンおよび関連種の呼称リスト
Author(s)	大館, 大學
Description	正誤表あり。表1, 2, 4, 5, 6について修正版あり。
Citation	北海道立北方民族博物館研究紀要, 21, 65-94
Issue Date	2012
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49083
Type	journal article
File Information	BHMNP21_65.pdf, 本文



〈研究ノート〉

ユーラシアの諸言語におけるクロテンおよび関連種の呼称リスト

大 舘 大 學*

Lists of Words for the Sable and Related Species in Eurasian Languages

Satoshi D. OHDACHI*

The sable is an important animal for fur trade in the world since the ancient time in Eurasia. Therefore, it is important to review the names for the sables in various languages in Eurasia to investigate the transmission of words for the sables. In the present paper, to give basic information for the transmission and transformation of the words for the sable in Eurasia, words for the sable and 3 other species of marten (*Martes* sp.), weasels, and squirrels in Eurasian languages were investigated.

In East Asia, the sable is called in various words. The sable was called “furuki” (or fuluki) in ancient Japan (ca. 8 to 13 c.). It is called “hoinu”-like words in Ainu language, “dambi” with modifiers or other words in Korean, “bulgan”-like words in Mongolic languages, and “segep”-like words in Tungusic languages, and “diāo” with modifiers in Chinese. In the regions of central-western Eurasia where the sable is (was) distributed, the sable is called in words of “bulgan”-like words in Mongolic languages, those of “kish”-like words in Turkic languages, “ńukśe”-like words in Finno-Ugric languages, and “sobol” in Russian. In Iranian languages, the sable is fundamentally called in “samur”. The word “samur” is spread in central-western Asia and southeastern Europe. In northern-western Europe, the sable is called in “sobol”-like words.

In Eurasian languages, martens are sometimes called in the words related with squirrels. Especially, it is note worthy that squirrels are called “uluki”-like words in Tungusic languages.

* 北海道大学低温科学研究所 (Institute of Low Temperature Science, Hokkaido University)

キーワード クロテン、キエリテン、マツテン、ムナジロテン、リス類

Key Words *Martes zibellina*, *Martes flavigula*, *Martes martes*, *Martes foina*, Squirrel

1. はじめに

クロテン *Martes zibellina* (Linnaeus 1758) は、ユーラシア北部に広く分布するイタチ科の哺乳類であり (図1)、その毛皮製品ないし原皮は古来より貴重品とされており (下山 2005; 西村 2003)、北方ユーラシアの歴史を考える上で重要な交易品である。日本においても、奈良～平安時代の渤海国や東北・蝦夷を介した交易 (養島 2005: 35-48, 2006: 76-99) および江戸時代のサンタン交易においてもクロテンは重要な交易 (貢納) 品であった (高瀬 2009: 81-106; 佐々木 1996, 2006: 12-55)。一方、物の流通・交流は、対象物の名称の交流・伝播にも影響する。例えば、北東アジアにおいてセイウチ *Odobenus rosmarus* (Linnaeus, 1758) を表す単語は、セイウチの生息しない地域の民族にもセイウチ牙の交易ルートに従い意味の転化を伴いながら伝播した可能性が示唆されている (菊池 2003: 134-138; Tsumagari 2010: 45-57)。同様にクロテンでも、生息地以外には毛皮の物流と共に名称が伝播していった可能性もあり、カムチャッカ半島からヨーロッパに至るユーラシア各地における名称を把握することは重要である。

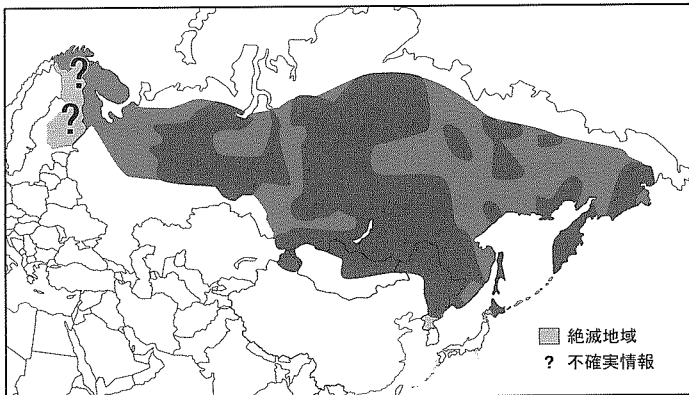


図1：クロテン *Martes zibellina* の分布図。濃い部分は現在の分布。薄い部分は過去の分布。“?” は疑問がある分布域。OHDACHI *et al.* (2010)、HEPTNER *et al.* (2002)、及びIUCNレッドデータリスト (<http://www.iucnredlist.org/>; 2010/9/1アクセス) に基づいて作製。Heikki HENTTONEN氏によればフィンランドには元々生息していなかったと思われる。

一方、日本では、奈良時代から平安時代にかけてクロテンの皮衣 (黒貂裘、黒貂之裘) が大流行した (大館 2011:161-177)。クロテンは平安時代を中心に、「フルキ」と呼ばれていた (『倭名類聚鈔』 (正宗 1954)。その語源については、広辞苑 (新村 1998) では、蒙古語の *bulaga* またはダフウル語の

bulga の訛ではないかと、モンゴル系言語の単語起源説が提案されている。しかしそれ以降、フルキの語源についての研究に大きな展開はない。フルキの語源の推定のためには、東アジア周辺におけるクロテンおよび関連種の網羅的リストが必要である。

また、近代のリンネ式分類学による学名の導入以前では、クロテンの近縁種との混称の可能性もあるので、近縁種や生態的・形態的に似ている動物の呼称も調べるべきである。したがって、ユーラシア東南部に分布するキエリテン *Martes flavigula* (Boddaert, 1785)、ヨーロッパから中国・モンゴルに分布するムナジロテン *Martes foina* (Erxleben, 1777)、

及び、ヨーロッパ中部から西アジアに分布するマツテン *Martes martes* (Linnaeus, 1758) の呼称も調査した。キエリテンはクロテンと東アジアで同所的に分布する (図2)。マツテンはクロテンとはヨーロッパ・ロシアからウラル山脈にかけての地域で共存している (図3)。一方、ムナジロテンは、マツテンとは分布が重なるがクロテンとはほとんど分布は重ならない (図4)。さらに、日本におけるテン類の呼称を調べるため、クロテンと系統的に近縁で (KOEPLI *et al.* 2008)、本州以南・九州以北に生息する (図5)、ニホンテン *Martes melampus* (Wagner, 1840)、および本土地域においてニホンテンと同所的に生息し形態的に類似している (OHDACHI *et al.* 2010) ニホンイタチ *Mustela itatsi* (Temminck, 1844)

(長崎県の対馬においては近縁種のシベリアイタチ *Mu. sibirica* (Pallas, 1773)) の現代方言についても調べた。さらに、東アジア文化圏の伝統的な生物分類法である本草学においては、テン・イタチ類はリス科、ネズミ科、トガリネズミ型目とともに「鼠類」に分類される。本稿ではこのうちでテン類と外形が似ているリス科の名称を、東アジアの言語を中心に調べた。

本稿では、ユーラシアの各言語間におけるクロテンの名称の伝播と日本の古語であるフルキの語源の推定のための基礎資料を提供することを目的とし、ユーラシア各地の諸言語におけるクロテンおよび混称の可能性のある関連種の呼称リストを作成する。

2. 調査法

調査対象は、以上の動物を表す現代の単語が主であるが、可能な限り古典による呼称も調べた。各出典はできるだけ印刷媒体にしたが、インターネットや私信での調査結果も示した。またテン類はその話者の居住域での大まかな生息の有無についても示した。イン

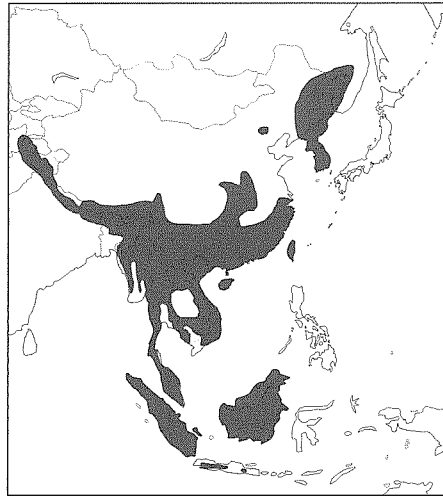


図2：キエリテン *Martes flavigula* の分布図。IUCN レッドデータリスト (<http://www.iucnredlist.org/>; 2010/10/1アクセス)、HEPTNER *et al.* (2002)、SMITH & XIE (2008)、FRANSIS (2008) に基づいて作製。

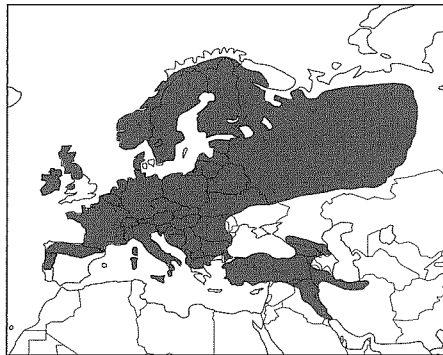


図3：マツテン *Martes martes* の分布図。MICHELL-JONES *et al.* (1992)、HEPTNER *et al.* (2002)、及び IUCN レッドデータリスト (<http://www.iucnredlist.org/>; 2010/9/1アクセス) に基づいて作製。

ターネットのアクセスと私信は2010年8月1日～2011年11月30日の期間におこなった。

3. ユーラシアにおけるクロテンの呼称

3.1. 日本(本土)におけるクロテンの呼称

Martes zibellina に当たるイタチ科哺乳動物は、現代標準日本語ではクロテンと呼ばれ、漢字では黒貂と書かれる。「貂」という漢字は『続日本紀』巻十（國史大系編修會 1966）の神亀5（728）年1月17日に渤海使が貂皮を300張貢いできたことを記したものが最初の公的記録と思われる（『続日本紀』の成立は973年）。この「貂」は主にクロテンのことを示すと考えられている

（養島 2005: 35-48）。平安時代初期の10世紀初頭に源順（みなもとのしたがう）が編纂した『倭名類聚鈔』（正宗 1954）においては、「黒貂」の和名はフルキ（布流木）、と記されている。また「黒貂」とは別項目に「貂」が記載され、その和名はテン（天）、

とあることから、この時代には黒貂と貂は別種と認識されていたらしい。しかし鎌倉中期以降になると、フルキの実用例はなくなり、テン類（*Martes* sp.）はテンとのみ呼ばれるようになった（海保 2000: 255-268）。また、貂の音読みとしチョウ（テウ）がある（鎌田・米山 2002）。従って、鎌倉中期以降、黒貂も一般的にクロテン、コクチョウと読まれるようになったようである。「貂」の音読みは、呉音、漢音ともにdiāo（チャオ）であり（藤東ほか 1993）、「チョウ（テウ）」は漢語起源の読みである。また「テン」という読みについても漢語起源とされている（吉田 2001）。

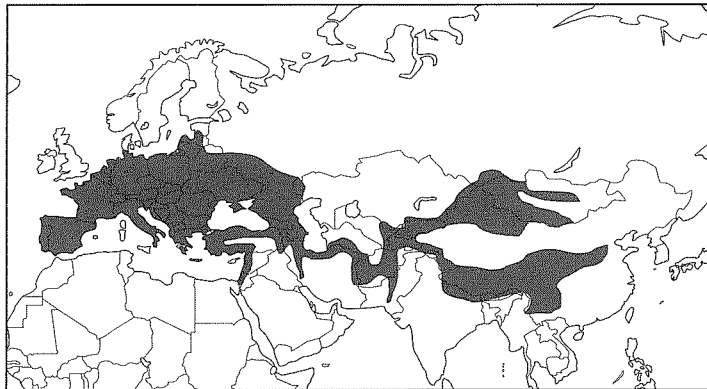


図4：ムナジロテン *Martes foina* の分布図。MICHELL-JONES *et al.* (1992)、HEPTNER *et al.* (2002)、SMITH & XIE (2008)、及びIUCNレッドデータリスト (<http://www.iucnredlist.org/>; 2010/9/1アクセス) に基づいて作製。

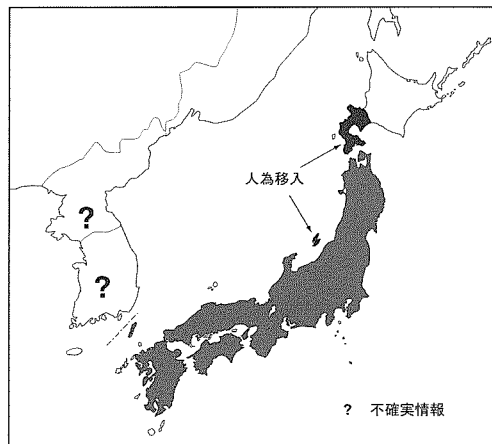


図5：ニホンテン *Martes melampus* の分布図。黒い部分は近年の人為分布。“?” は不確実な分布。OHDACHI *et al.* (2010) に基づいて作製。

3-2. 日本周辺およびシベリア諸民族のクロテンの呼称

前述のように、公式記録上、日本に初めてクロテンの毛皮をもたらししたのは、現在の北朝鮮、中国東北部、ロシア沿海州にまたがる地域に存在した渤海国からの使節である。その後、渤海国は30回以上も使節を日本に送り、クロテンの毛皮を貢納しており、クロテン皮の供給源として重要である（上田 2004; 蓑島 2005: 35-48）。従って日本の古語のフルキは、渤海国関係の言語との関連がまず疑われる。

渤海国の主要構成員はツングース系の靺鞨族や高句麗の旧支配層で、他にモンゴル系の契丹族、漢族などからなる複合民族国家である（濱田 2000; 上田 2004）。また、渤海使の使節にはイラン系民族のソグド人が含まれていたと考えられ（上田 2004）、さらに、定説ではないが渤海国のクロテンを扱う商人にはソグド人が活躍したという説もある（SHAVKUNOV 1991: 51-55; シャフクノフ 1992: 93-100）。このためソグド語を始めとするイラン諸語も探索対象となる。また、ソグド人にはソグド語とチュルク諸語とのバイリンガルが多数いたこと（森安 2007）から、チュルク諸語の単語も重要な検討対象である。さらにクロテンの毛皮は渤海国経由のみならず、北海道-奥州経由でも日本にもたらされたと思われる（蓑島 2005: 35-48）ので、当時の北海道に居住していた擦文文化人の子孫と思われるアイヌ、およびオホーツク文化人と深い関連があるニブヒ（SATO *et al.* 2007: 618-627; SATO *et al.* 2009: 171-180）の単語も重要な検討対象である。従って、フルキの語源を調べるには、以上にあげた民族の単語を検討する必要がある。

まず大和民族と隣接する民族の呼称である。北海道や樺太（サハリン）のアイヌは、クロテンのことを一般にホイヌおよびその類似語（hoinu類似語と仮称）で呼んでいる（表1）。さらにはカスペキラ（しゃもじをもって逃げるもの）、ポンチロンヌブ（小さい獣）などの別称もある。また南千島にもクロテンは存在していたが、そこではタンネルム（長いネズミの意か？）と呼ばれていた。「ホイヌ」は、文献的には遅くとも江戸時代中期には使用されていたことが記録されている（出利葉 2002: 97-163）。一方、ニブヒ語では、樺太ではogrofとその類似語（ogrof類似語と仮称）、アムール（沿海）地方ではlumrと呼ばれている（表1）。

日本に近接する朝鮮半島（韓国・朝鮮語）ではテン類はdambi（ダムビ）と称される。クロテンに対しては、韓国ではこれに「黒色の」という形容詞が付き、geomun-dambi（ゴムウン・ダムビ）やhuk-dambi（フック・ダムビ）と呼ばれる（表1）。一方、北朝鮮語では、dambiを含まない呼称geomun-don（ゴムウン・ドン）と呼ばれている。江戸時代の日本の本草学の集大成とも言える『重訂本草綱目啓蒙』（日本古典全集刊行會 1928）ではクロテンの朝鮮での名称として、トツピないしトッピと記載されている（表1）。

次に日本に近い中国（漢語）における呼称であるが、清時代以前の古典では「黒貂」、現代標準中国語（普通話）では「紫貂」と表し、現代の発音はそれぞれhēi diāo とzǐ diāoである（表1）。このように中国語（漢語）ではクロテンは「貂」に修飾語を付加して

大館大学 ユーラシアの諸言語におけるクロテンおよび関連種の呼称リスト

表1: 東アジアと周辺域におけるクロテンの名称. Words for the sable in eastern Asia and neighboring areas.

語群、語系等 language group	言語 language	拡張ローマ字表記 ^a または 国際音声記号表記. extended Roman or IPA ^b character	原著表記 ^c original character	話者の居住地にお けるクロテンの生 息 ^d distribution of sables in residential area of speakers	備考 note	出典 ^e source
シナ語派 Sinitic	古典中国語 classic Chinese	-	黒貂	no	古い発音および地方音については	[1]
	現代標準中国語 modern standard Chinese	zǐ diāo, hēi diāo	紫貂、黒貂	yes, only in Northeast China	不明 紫貂が自然科学用語、黒貂は主に 古典的、文学的用法	[2,3]
チベット・ビルマ語 群 Tibeto-Burman	チベット語	wo ga, spu nag/bu nak	省略	no	後二者は「五體清文鑑」での用法。 spu=毛、nag=黒	[4,5]
不詳(アルタイ系?) not determined (Altaic)	Tibetan 古典日本語1 classic Japanese1	furuki/fuluki	フルキ	no	布流木(倭名類聚鈔)。鎌倉中期以 降の用例は無いとされる。	[6, 7]
	古典日本語2 classic Japanese2	kuro-ten, koku-teu(chou)	クロテン、コクチョウ	no	「貂」に対する読みとして、「倭名 類聚鈔」に「天」、「和漢三才図説」 に「天牟」。に大日本史の注釈書に コクテウ	[6,8,9,10]
	現代日本語 modern Japanese	kuro-ten, koku-chou	クロテン、コクチョウ	yes, only in Hokkaido	黒貂	[8,9]
不詳(アルタイ系?) not determined (Altaic?)	古典朝鮮語 classic Korean (Chosun)	totsupi (or toppi)	トツピ(トッピ)	yes, only in northern part, but noy in present South Korea.	日本の江戸時代に当たる	[10]
	韓国語 South Korean	geomun-dambi, huk-dambi	검은담비, 흑담비	no	ゴムウン・ダムビ。フック・ダムビ。 geomun/huk=黒、dambi=テン (Martes sp.) 前者が標準科学用 語。	[2,11,12]
	韓国語俗語 South Korean	jal	갈	no	ヂアル	[13]
	北朝鮮語 North Korean	geomun-don	검은돈	yes	ゴムウン・ドン。don=お金。	[14,15]
不詳 not determined	アイヌ語(北海道 と樺太) Ainu in Hokkaido and Sakhalin	hoinu/hóynu	-	yes	ホイヌ。江戸時代の和文文書には 「保犬」との当て字もある。	[16, 17, 18]
	アイヌ語(十勝・ 道東) Ainu in Tokachi and eastern regions of	óinu	-	yes	オイヌ	[16]
	アイヌ語(北海道) Ainu in	kasúpekira/kasipekira/	-	yes	カス(シ)ベキラ	[16]
	アイヌ語(北海道) Ainu in	káspckira	-	yes	ポンチロンヌブ	[16]
	アイヌ語(千島) Ainu in the	pón-čironnup	-	yes	タンネルム	[16]
不詳 not determined (Yeniseian language family)	ケント(エニセイ・ オスチャーク)語 Ket (Yenisei Ostyak)	tannnerum	-	yes	ヨーエデ	[19]
不詳 not determined (Paleosiberian language?)	イテリメン(カム チャダール)語 Itelmen (Kamuchadal)	yoede	ёәде	yes		[20]
不詳 not determined	コリマ・ユカギール 語 Kolyma Yukaghir	txəmıxəm	-	yes		[20]
古シベリア諸語 Paleosiberian languages	ニブヒ(ギリヤーク) 語(樺太東海岸) Nivkh (Gilyak) in eastern coast of ニブヒ語(樺太東 海岸) Nivkh in eastern coast of Sakhalin	nopfo (noksho)	-	yes	ノクシヨ	[20]
	ニブヒ語(アムール 地方) Nivkh in Amur region	oılbı/oıxraf/oıxrob (oglef/okhruf/okhrob)	-	yes		[20,21,22]
	チュクチ語 Chukchi	ogrof(ogrof)	оѡроѡ	yes		[23]
	エヴエンキ語1 (サハ共和国) Evenki in Sakha (Yakutia)	lnmr	лунр	yes		[23]
ツングース諸語 Tungusic	チュクチ語 Chukchi	geıyt, kytgym	гэйт, кыт, кытгым	yes		[24]
	エヴエンキ語2 Evenki	chipkaan	чиккаан	yes		[24]
	エヴエンキ語3 Evenki	segep (b,v,l) /sevep/chegib	сэҕэп/сэвэп/сэҕэб/сэчэб/сэгэф/чэгип	yes		[25]
	エヴエンキ語4 Evenki	nekee/naka/nike/nuke/ neko/nekee	и'экэ/и'ака/и'икэ/и'укэ /	yes		[25]
	Evenki	balini (one autumn), d'yeenkyee/d'inkyee, ilpiti	балини, дёнкё/дйнкё, илинт, мутомо, чабид		baliniは初めての秋を迎えた個体 という意味か? egieにはクルバガ	[25]

		(for third year sable), mutomo (for male), chabidar. egie. anda. kunku	ар, эгэ, анда, кунку		ンMarmota sibiricaの意味もあり。 andaには友人という意味。kunku にはクマという意味もある。	
	エヴェン語 (サハ 共和国) Even in Sakha (Yakutiya)	khegen	хэгэн	yes		[24]
	エヴェン語2 Even	hegp/hep/heip/hegep/ep	hэүл/Һэүл/Һэгэ и/Һэвэн/эүи	yes		[25]
	ネギダール語 Negidal	segep/seyp/ceep, luju (for big sable with long hair)	сэгэн/сэбү/сэп, лүзү	yes		[25]
	ソロン語 Solon	segeni	сэгэни	yes		[25]
	ナナイ語 Nanai	seepe/sebu/sefe	сэпэ/сэбү/сэфэ	yes		[25]
	ウチリ語 Ulchi	seepe	сэпэ	yes		[25]
	ウイルタ (オロツ コ) 語 Uilta	seppe/sepe	сэппэ/сэпэ	yes		[25]
	満州語1 Manchuian	seke	сэкэ	yes		[5, 25, 26]
	満州語2 Manchuian	lunggu/lungu (for male), aibó/aibu/ajkhū (for female). sakhalcha (for very black one)	лунгу, ајху, саха, лча	yes		[5, 25, 26]
モンゴル諸語 Mongolic	女真語 Jurchen	séh-k'gh	-	yes	死語。	[25]
	オロチ語 Oroch	noso	носо	yes		[25]
	ウデヘ語 Udeghe	nyo	нё	yes		[25]
	モンゴル語1 Mongolian	bulga/bulgan/bulaga	булга/булган	yes	ブルガ/ブルガン/ブルガ, bulagaは 「五體清文鑑」での用法。	[5, 28, 29]
	モンゴル語2 Mongolian	eikis (for male), ebsikis (for female)	-	yes	「五體清文鑑」での用法	[5]
	ダグル語 Dagur	bulga (or buhuga)	ブルガ	yes	ローマ字はカタカナ表記より音者 が類推	[8]
チュルク諸語 Turkic	ブリヤート語 Bryatian	bulgan	булган	yes	ブルガン	[30]
	カルムイク語 Kalmykian	bulhan	булхан	yes		[30]
	サハ(ヤクート語) Sakha (Yakutian)	kiis, saarba	киис, саарба	yes		[24, 31]
	ショリア語 Shorian (Shor)	alba/albuga	-	yes		[32]
	古代トルコ語 (13 c以前) ancient Turkish (before 13c)	kish, teying	-	yes		[33]
	チュヴァシ語 Chuvash	kash				
	バシキール語 Bashkir	kesh	-	yes		[34]
	クタル語 Kartal	kesh (kes)	-	yes		[32]
	中世トルコ語 (13- 14c以降) medieval Turkish or Chagatai language (after 現代トルコ語 (ト ルコ共和国) modern Turkish	samur/semmur, bulgan	-	no	チャガタイ・トルコ語。 samur/semmurはベルシヤ語起源。 bulganはモンゴル語起源。	[35]
	現代ウイグル語 modern Uyghur	qara bülghün, bulgan	قارا بۇلغۇن	no	カラ・ブールグーン。後者は「五 體清文鑑」での用法。	[5, 38]
	カザフ語 Kazakh	bulgun	-	no		[39]
	ウズベク語	sobol'	-	no		[32]
	トルクメン語 Turkmen	samur, sobol'	-	no		[32]

a) 近い音価を持つローマ文字を便宜的に当てはめた場合もある。

b) International Phonetic Alphabet

c) アラビア文字系単語では全て独立系の文字

d) 話者の居住地は曖昧な点があるのであくまで参考

e) 数字は付記の出典リストに対応

呼ばれている。なお、中国ではクロテンは東北部（満洲地方）にしか生息しておらず、本
来の漢語圏にはクロテンは生息しない（図1）。

ツングース諸語については、エヴェンキ、エヴェン、ネギタール、ソロン、ナナイ、ウ
リチ、ウイルタ、満洲、女真の各語において、segep、hegep、seepe、sekeなどと同源と
思われる単語で呼ばれている（表1）。これらの単語群をsegep類似単語と仮称する。しか
し、これらの言語でも異称や他の動物との混称でよばれる場合もある（表1）。またオロチ
語やウデヘ語では上述の言語とは語源が異なると思われるnosoやnyoといった単語で呼ば
れている（表1）。

また江戸時代後期に間宮林蔵は、アムール川中流のデレンで清朝の出張所（満洲仮府）で「土民」（サントアン族またはコルデック族）がクロテンのことをアイヌ語と同様にホイヌと呼んでいるのを記録しており（『東鞆紀行』中巻）（大谷 1981）、この時期にはアムール川河口周辺の部族にもクロテンのことをホイヌと呼ぶ人達がいたことが分かる。ツングース系民族のウリチにはアイヌ人を祖先に持つという氏族が存在する（大塚 2003: 5-16）ので、ホイヌという単語はアイヌからサントアン人へのクロテン皮の交易の結果だけでなく、話者そのものの移動による単語の移入も考えられる。ただし、現在ではウリチを含むアムール地方の先住民族の言語ではホイヌと関連する単語の報告はない（表1）。

モンゴル諸語では東のモンゴル語（ハルハ語）から西のカルムイク語まで、クロテンはbulgan（ブルガン）とその類似語（bulgan類似語と仮称）で呼ばれるが、メスやオスに対しては別の呼称がある（表1）。また、モンゴル諸語の分布域はほぼクロテンの生息域と重なっている（図1）。

チュルク諸語であるが、チュルク系民族はユーラシア大陸に広く分布し、他の言語からの借用語が多い（小松 2000）ので注意が必要である。チュルク系民族の分布の東端であるサハ（ヤクート）語ではkiisやsaarbaと呼ばれる（表1）。またシベリアのショリア語でもalbaなどとサハ語のsaarbaと類似した呼称をしている。このほか西進した一派のチュバシ語、バシキール語、タタール語や13世紀以前の古代トルコ語では、サハ語のkiisと同源と思われるkishやkash、keshなどと呼ばれている（kish類似語と仮称）。一方、モンゴル系民族と深く接触した地域の部族（中世トルコ語や現代ウイグル語、カザフ語、トルクメン語）ではbulgan類似語に、またペルシャ語の影響を受けた部族（中世トルコ語、トルクメン語、現代トルコ語など）（坂本 1996; 小松 2000）ではsemmurあるいはsamurに、そしてロシア語の影響の強いウズベク語ではsobol'（соболь）が用いられている（表1）。中世トルコ語のsemmurと現代トルコ語のsamurはペルシャ語から、中世トルコ語のbulganはモンゴル語からの借用語とされている（Zenker 1979; 竹内 1996）。このように外来語起源とされるsamurやbulgan類似語を用いている地域は、クロテンが全く生息しないか、限定された地域に生息しているだけである（図1）。一方、kish類似語を使用している地域は、クロテンの生息地と重なる傾向にある。

以上の他の言語であるが、イラン諸語のソグド語では今のところクロテンを表す単語は見つかっていない（吉田豊 私信）。また、東アジアで優勢な文化圏の一つにチベット文化圏がある。モンゴル語圏を除くこの文化圏にはクロテンは分布していないが（図1）、その毛皮は交易品として重要であったと思われる。クロテンは現代チベット語ではwo ga、清代のチベット語ではspu nagないしbu nakと呼ばれていた（表1）。また、11～13世紀に東アジアの内陸部で優勢であったチベット系タングート族の西夏語には今のところクロテンに相当する単語は見つかっていない（荒川慎太郎 私信）。この他、クロテンが生息する北東シベリアやカムチャッカのケット語、コリマ・ユカギール語、イテリメン語、チュクチ

語ではそれぞれ独特の呼称を持っている (表1)。

3-3. フィン・ウゴル諸語でのクロテンの呼称

フィン・ウゴル諸語はウラル山脈周辺から、フィンランド、ラップランド (フェノ・スカンジア北部、コラ半島)、エストニアやハンガリーまで分布する。クロテンの生息域に分布するボチャーク語やコミ語ではniz類似語 (仮称) で呼ばれている (表2)。一方、フィンランド語やサーミ語、ハンガリー語ではsobol類似語で呼ばれている。フィンランド語ではsobol類似語のsoopeli (ソーペリ) の他にフィン・ウゴル語起源のnokinäätä (ノキナータ) も使用されるが、一般に普及した呼称ではない (水本秀明 私信)。フィンランド語のnäätäは本来マツテンを表す単語である (表5)。イナリ・サーミ語ではごく最近にフィンランド語から借用した語を用いているが (表5)、それ以前は該当単語がなかった (Ilmari MATTUS 私信)。

ところでフィンランド語やサーミ諸語では、以上のように、基本的に外来語起源と思われる単語を用いておりフィン・ウゴル語起源の単語の古い記録がないことから、クロテンはフィンランドより絶滅したのではなく、元々分布していなかったという説が現在、有力視されている (Heikki HENTTONEN私信)。

3-4. 西アジア・南アジアにおけるクロテンの呼称

イラン諸語の単語であるが、クロテンを示す現時点で一番古い単語の記録は3～7世紀のササーン朝ペルシャの公用語のパフラヴィー語 (中世ペルシャ語) のsimōr (スィモール) である (表2)。そして、10世紀のペルシャの詩人ルーダキーの近世ペルシャ語の詩にsamūr (サムール) の用例があるので (守川知子 私信)、遅くともこの頃までにはsamūrと呼ばれるようになった。そして現代ペルシャ語やタジク語でもsamūrやsamurと呼ばれている。

西アジア、アナトリア、南アジアにはクロテンは生息しない (図1)。イラン諸語以外では、トルコ語およびアラビア語 (表2) でもクロテンは近世～現代ペルシャ語と同じくsamur (ないし sammūr, サンムール) と呼ばれている。一方、インドの公用語のヒンディー語ではsebalという単語が用いられている (表2)。

3-5. ヨーロッパにおけるクロテンの呼称

ヨーロッパにおいてはヨーロッパ・ロシアの東部が確実なクロテンの生息地である (図1)。ロシア語ではクロテンはsobol' (соболь, ソーバリ) と呼ばれている (表2)。sobol' と同源と思われる単語はクロテンが生息しない地域の他のスラブ諸語でも使用されている (sobol類似語と仮称)。ところがスラブ諸語やバルト諸語ではクロテンを表す単語はsobol類似語の他にkuna, caunaないし類似の単語 (kuna類似語と仮称) が用いられるか、

表2: ユーラシア中央-西部におけるクロテンの名称。出典リストは付記に示す。Words for the sable in western Eurasia.

語群、語系等 language group	言語 language	拡張ローマ字表記 extended Roman character	原著表記 ^b character	original	話者の居住地にお けるクロテンの生 息 ^c distribution of sables in residential area of speakers	備考 note	出典 ^d source
フィン・ウゴル語 派 Finno-Ugric	ウラル祖語 inferred Uralic proto-language			-	yes	テン (<i>Martes</i> sp.) 一般を示す単語 は <i>nuksé</i>	[40]
	イナリ・サーミ (ラップ) 語 Inari Saami (Lapps)	soobel		-	extinct(?)	2001年に <i>Lisakki Mattus</i> がフィン ランド語 <i>soopeli</i> から借用	[41]
	北サーミ語 northern Saami (Lapps)	無し non		-	extinct(?)	テン (<i>Martes</i> sp.) 一般を示す単語 は <i>neahiti</i> (ネアハティ)	[41]
	スコルト・サーミ 語 Skolt Saami (Lapps)	zoo'bbel		-	extinct(?)	スコルト・サーミの風俗はロシア 風	[41]
	フィンランド語 Finnish (Suomi)	soopeli, nokinäätä (古形は nois)		-	extinct(?)	ソーベリ、ノキナタ(ノイス)。 noki=煤、naata=貂。どちらも現 代フィンランドでは一般的でない (水本秀明 私信)	[42]
	エストニア語 Estonian	不明 unknown		-	extinct(?)	テン (<i>Martes</i> sp.) を示す単語は <i>nugis</i> (ヌキス)	[40]
	ボチャーク語 Votyak	niz		-	yes		[40]
	コミ語 Komi	niz	низ	-	yes		[43]
	ボグル(マシ)語 Vogul(Mansi)	不明 unknown		-	yes	テン (<i>Martes</i> sp.) を示す単語は <i>noks</i>	[40]
	ハンガリー(マ ジャール)語 Hungarian	coboly		-	no		[40, 44]
セム語派 Semitic	標準アラビア語 standard Arabic	sammūr	سمور, سمور	no	no	サンムール。古典アラビア語には 見つからないのでペルシア語起源 と思われる (守川知子 私信)。	[45]
印欧系言語 Indo-European							
インド語派 Indo-Aryan	ヒンディー語 Hindi	sebal	सेबल	no	no		[46]
イラン語派 Iranian	中世ペルシア語 (パフラヴィー語) medieval Persian (Pahlavi scripts)	simōr	省略	no	no	スィモール。ササーン朝ペルシア (AD.226-651年)の公用語。	[47]
	近世-現代ペル シア語 modern Persian	samūr		سمور	no	サムール。10世紀のペルシアの詩 人ルーダキーのペルシア語の詩に samurの用例があり (守川知子 私信)。	[48, 49, 50]
独立 independent	タジク語 Tajik Afghanian	samur	самур	no	no		[32]
	アルメニア語 Armenian	samur	省略	no	no		[32]
南コーカサス語群 South Caucasian	グルジア語 Georgian	siasamuri	სიასამური	no	no		[51]
独立 independent	現代ギリシャ語 modern Greek	zimpeḗna	ζυμπελίνα	no	no		[52]
東スラブ語群 East Slavic	ロシア語 Russian	sobol'	соболь	yes	yes	ソーバリ、男性名詞	[53, 54]
	ウクライナ語 Ukrainian	sobol'	соболь	no	no	東スラブ(ロシア、ウクライナ、 ベラルーシ)としては分布してい た。 ソーブル、男性名詞	[55]
西スラブ語群 West Slavic	ポーランド語 Polish	sobol'	-	no	no		[56]
	チェコ語 Czech	sobot asijský, kuna socol, sobol východní (old expression) kuna sobol'	-	no	no	asijský=アジアの。kuna=テン。 východní=東の。	[57]
	スロバキア語 Slovakian		-	no	no		[57]
南スラブ語群 South Slavic	ブルガリア語 Bulgarian	samur, sobol	самур, собол	no	no	サムール、ソーボル	[58, 59]
	セルビア・クロア チア語 Serbo- Croatian	samur	самур	no	no	オスマン・トルコ語起源	[60, 61, 62]
バルト語派 Baltic	ラトビア語 Latvian	sabulis, Sibīrijas cauna	-	extinct(?)	extinct(?)	Sibīrijas=シベリアの。 cauna=テン (<i>Marres</i> sp.)	[63]
	リトアニア語 Lithuanian	sabalas	-	extinct(?)	extinct(?)		[64]
北ゲルマン語群 North Germanic	スウェーデン語 Swedish	sobel	-	no	no	通性名詞	[65]
	デンマーク語 Danish	zobel	-	no	no	通性名詞	[66]
	ノルウェー語 Norwegian	sobel	-	no	no	通性名詞	[67]
	アイスランド語 Icelandic	safali	-	no	no	通性名詞	[68]

西ゲルマン語群 West Germanic	ドイツ語 German	Zobel	-	no	ツォーベル。男性名詞。ロシア語 [69,70] 起源。
	オランダ語 Dutch	sabelmartermatrix sable,	-	no	通性(男性)名詞 [71]
	中世英語 medieval English	martryn sable	-	no	古フランス語のmartre sable [72] 起源
	現代英語 modern English	sable	-	no	セーブル [73,74]
イタリア語派 Italic	中世ラテン語	zibellina, sabellum	-	no	文語。前者はイタリア語、後者は古フランス語起源。ツイベリノ。 [74]
	medieval Latin		-		
	イタリア語 Itarian	zibellino	-	no	男性名詞。 [75]
	古フランス語 old French	martre sable	-	no	[72]
	フランス語 French	zibeline	-	no	ジブリン。女性名詞。 [76,77]
	スペイン語 Spanish	marta cibelina	-	no	マルタ・シベリナ。女性名詞。 [78] marta=テン、cibeline=黒い。
ケルト語派 Celtic	カタルーニャ語 Catalan	marta gibelina	-	no	[79]
	ポルトガル語 Portuguese	zibeline	-	no	女性名詞 [80]
	ブルトン Breton	sebelinez	-	no	フランス内のケルト系言語 [81]
			-	no	

a) チェルク語、モンゴル語、イラン語系については表1) 参照
b) アラビア語では全て独立系の文字

c) 話者の居住地は曖昧な点があるのであくまで参考
d) 数字は付記の出典リストに対応

sobel類似語と組み合わせられて呼称される場合がある(表2)。

北部・西部ヨーロッパにはクロテンは生息しないが、それを表す単語としてsobel類似語が広く用いられている。例えば、ドイツ語にはクロテンの毛皮交易とともにスラブ語(具体的言語は不明)経由でsobel類似語が入り、Zobel(ツォーベル)と転訛したらしい(DROSDOWSKI 1989)。この他に、スウェーデン語ではsobel、英語ではsable(セーブル)、フランス語ではzibeline(ジブリン)などと北・西ヨーロッパではsobel類似語が卓越している(表2)。英語のsableは、14世紀の中期フランス語の紋章学における黒色(本来はクロテンの意)を意味するsable由来とされている(小西・南出 2001)。

この他の西ヨーロッパにおけるクロテンを表す単語は、sobel類似語の単語にオランダ語ではmarter、スペイン語ではmartaなどの単語(marten類似語と仮称)を組み合わせられて呼ばれるケースも見られる(表2)。またヨーロッパの言語でも、オスマン・トルコの支配域であった南スラブ地域やコーカサス地方では、クロテンはトルコ語と同じくsamurと呼ばれることが多い(表2)。

以上のようにクロテンを示す単語は、クロテンがほとんど分布しないヨーロッパでは、北方では主にsobel類似語、南東ではsamurが卓越している。

4. クロテンの近縁種および類似種の呼称と混称

4.1. 本土地域におけるニホンテンとイタチの呼称と混称

3-1節で述べたように、クロテンもしくはニホンテンを表す日本語のフルキ、テン、チョウはいずれもが外来語起源と考えられている。つまり日本語には古典から現代に至るまで、テン類に対する明らかな「ヤマト言葉」が見つからない。一方、本州、四国、九州、対馬にはニホンテン(対馬ではツシマテン *Ma. melanpus tuensis* という亜種)というクロテンの近縁種が生息しており(OHDACHI *et al.* 2010)、奈良・平安時代の日本

人にもテン類の存在は認識されていたはずである。従って、テン類に対するヤマト言葉がないことは不自然である。この理由として二つの説が考えられる（二律背反ではない）。

（１）もともとニホンテンに対応するヤマト言葉があったが、遅くとも10世紀初頭に外来語起源の「テン」に置き換わった。（２）ニホンテンと同所的かつ普遍的に生息し、生態・形態的に類似しているニホンイタチ（対馬においてはシベリアイタチ）と混称されていた。

本土地域におけるニホンテンとニホンイタチ（対馬においてはシベリアイタチ）の混称の確認のために、本州以南・九州以北（つまり自然分布域）におけるこれら2種に対する現代方言について、白井の方言集（白井 2000-2005）から抜粋した（対馬においては伊澤雅子氏の私信）（表3）。

その結果、ニホンテンのことを「イタチ」の関連語で呼ぶケースは、栃木県のキイタチ、淡路島のミヤイタチ、岡山県のコンコンイタチ、テンコロイタチが確認できた（表3）。反対にニホンイタチのことを「テン」およびその関連語で呼ぶケースも少なからず見られた（例えば長野県や静岡県のコゾー、富山県のテントバ、兵庫県のテンなど）。

新潟・富山・長野・石川県周辺では、ズットおよびその関連語がニホンテンとニホンイタチの両方を表す例が頻繁に確認できた（表3）。一方、富山・石川県と近畿、四国ではトバ、トマおよびその関連語がニホンテンとニホンイタチの混称名となっている場合が多い。

ニホンイタチの代わりにシベリアイタチが分布する対馬では、シベリアイタチのことをイタチ、ニホンテン（亜種ツシマテン）のことをワタボウシなどと呼ぶ（表3）。ワタボウシはツシマテンの冬毛の白い頭部の色からこのように呼ばれているものであろう。この呼称は冬だけでなく、夏毛の個体に対しても使用されている（伊澤雅子 私信）。

以上のように、現代日本語方言では、多くの地域でニホンテンとニホンイタチが混称されることが示された。

また、17世紀末刊行の『本朝食鑑』（十一鼠）（正宗 1933）の「鼬鼠」（伊太知、イタチ）の説明は、「俗号天、源順訓貂、称天者未詳、或曰老鼬也」との説明があり、江戸時代中期には「鼬鼠」（イタチ）のことを俗称として「テン」と呼んでいることがわかる。そして、『本朝食鑑』の著者の人見必大は、平安時代に源順が『倭名類聚鈔』で「鼬鼠」ではなく「貂」のことを「テン」と読ませていることに疑問を呈している。一方、『倭名類聚鈔』では、「鼬鼠の和名はイタチ（以太知）」と説明していることから、「イタチ」の呼称自体は遅くとも平安時代初期には存在していた。

時代を鎌倉時代まで遡って、テン／イタチ混称の傍証例として、13世紀成立の『源平盛衰記』（近藤 1901-02）の「依行家謀叛木曾上洛事」の節の次の記述がある。

十郎蔵人殿こそ鼬のなき間の貂誇りとかやの様に、院のきり人して院宣を給り、木曾殿を誅奉べき、其間候へと申下したりければ、木曾大に驚て平家を打捨て、夜を日に継で馳上る。

表3: テンとイタチに対する現代日本語の方言. Modern Japanese dialects for martens and weasels.

都道府県	ニホンテン <i>Martes melampus</i>	イタチ <i>Mustela itatsi</i> or <i>M. sibirica</i>
青森県	タサエッコ (十和田市)、テンカラ (津軽南部)	記載無し
岩手県	テン (遠野市)、キンテン (岩手郡、気仙郡)、テンガエ (県北)、テンゴロー (和賀郡、下閉伊郡)、テンパー (和賀郡)、テンマル (岩手郡)、ミヤマテン (二戸郡)	イダヂ (下閉伊郡)、イダンディ (和賀郡)、エダヅ (県内各地)、オカノカミ (県南)
秋田県	テン (由利郡)	イタンジ (全域)、イダンジ (由利郡)
山形県	記載無し	イタチ (庄内地方)、イダチ (庄内地方)、イタヂ (西田川郡)、イダヅ (最上郡)、エダヂ (西田川郡)、エダヅ (各地) (以上はイタチ類として記載)
宮城県	記載無し	イダヂイ (伊具郡)、イダヅ (角田市)、オカノカミ (多賀城市) (以上はイタチ類として記載)
福島県	キチコテン (各地)、テデポー (会津若松市)、テン (岩瀬郡)、テンボ (各地、西白河郡マタギ言葉)、テンポー (会津地方)、テンポー (会津地方、喜多方市、河沼郡、大沼郡、耶麻郡)、ハヤ (西白河郡マタギ言葉)、ヒテン (各地)	イダヂ (南会津郡)、エダヂ (いわき市)
茨城県	ヤイジー (各地)	イタチッコ (下妻市)、イタチメ (水戸市)、イダヂメ (水戸市、北部各地)、エダヂ (茨城県)、ハナクロ (各地)、ハナグロ (久慈郡、東茨城郡、那珂郡)、ハナクロイタチ (水戸市)、ハナグロイタチ (水戸市、真壁郡)、ハナグロイダヂ (各地)、ハナグロメ (多賀郡)、ハナジロ (多賀郡)、ハナックロイタチ (岩井市、猿島郡)、ハリガネイタチ (猿島郡)、フト (猿島郡)
栃木県	キイタチ (各地)、テンボ (各地)	イダチ (那須郡)、エタチ (下都賀郡)、ハナグロ (各地)
群馬県	テンマル (各地)、ハヤ (各地)	ソーキリ (各地)、ミチキリ (各地)
埼玉県	テン (各地)、テンマル (各地)、ホンテン (各地)	イタチ (各地)
千葉県	テン (各地)	イタチ (君津市、安房郡)、イダヂ (海上郡、山武郡)、イダヅ (山武郡)、エタチ (千葉市、市原市)、エタヂ (山武郡)、エタチ (市原市)、エダヂ (印旛郡)、エタツ (山武郡)、エダヅ (山武郡)、カワネズミ (海上郡)、キッキ (君津市、君津郡)、チーチ (君津市、君津郡)
東京都	テンマル (西多摩郡)	-
神奈川県	テンマル (津久井郡)	-
新潟県	スステン (全域; 夏毛に対して)、キテン (全域; 冬毛に対して)	イタツ (各地、村上市、新発田市、豊栄市、岩船郡、北蒲原郡、東蒲原郡)、カワイタチ (各地)、ズイ (各地)、ズイト (各地)、ズット (各地)、ズイト (各地)
山梨県	記載無し	イタチ (各地)
長野県	ズット (大町市、北安曇郡、上水内郡)、テンコゾー (上水内郡、北佐久郡)	エタチ (各地)、ゴッター (下伊那郡)、ズット (大町市、北安曇郡)、ズットー (北安曇郡)、ゾット (北安曇郡)、ゾットー (北安曇郡)、テンコゾー (佐久市)
静岡県	記載無し	イグラ (遠江地方)、イタ (各地)、イタチ (各地)、ガッチ (引佐郡)、チャキ (小笠郡)、デンコ (浜名郡)、デンコゾー (田方郡)、テンコチョ (浜松市、湖西市)、トマス (賀茂郡)、ヘッピー (沼津市、榛原郡)
愛知県	記載無し	イグラ (北設楽郡)、イグラモチ (北設楽郡)、イタイチ (知多郡)、オサコ (各地)、キチキチ (名古屋市)、クダイタチ (名古屋市、メスに対して)

岐阜県	キテン（大垣市、不破郡）、テン（各地）、テンテコ（飛騨地方）	イタチ（各地）、イダチ（安八郡、羽島郡）、ドイタチ（大垣市、不破郡）、トバ（飛騨地方）、トバス（飛騨地方）、ヘコキ（瑞浪市、揖斐郡）
三重県	キテン（員弁郡）、チョボ（鈴鹿郡）	イタチ（全域）、イッタチ（上野市、名張市、鳥羽市、阿山郡、名賀郡、一志郡、南牟婁郡）
富山県	ズット（下新川郡）、ズットコ（下新川郡）、テン（東礪波郡）、テントバ（礪波郡、高岡市、小矢部市、新湊市）、テントワ（高岡市）、トバ（高岡市）、トバス（新湊市）、トワ（高岡市）、ムズナ（各地）、モジ（各地）	イタチ（富山市、婦負郡）、イタチトバ（礪波市、礪波郡、東礪波郡）、イタツ（下新川郡、射水郡）、イテヤチ（各地）、エタツ（下新川郡）、ジット（富山市、魚津市、下新川郡、黒部地方、魚津市）、ズットコ（下新川郡）、テントー（各地）、テントバ（礪波郡、新湊市、高岡市、射水郡、西礪波郡、東礪波郡）、テントワ（高岡市）、ドス（上新川郡）、トバ（各地）、トバス（中新川郡）、トバス（各地）、トワ（富山市、高岡市）、トワス（富山市、下新川郡）、トンバ（各地）、パス（富山市、上新川郡）、トバス（婦負郡；オスに対して）、ミズイタチ（下新川郡；メスに対して）
石川県	テントバ（石川郡）	イタチトバ（各地）、オトバ（各地）、キチキチトバ（江沼郡）、ズッコ（各地）、ズット（珠洲郡）、テントバ（河北郡）、トバ（各地）
福井県	オトバ（坂井郡）、テンキチ（各地）、テントバ（坂井郡）	エタチ（丹生郡）、トバ（各地）、トマス（若狭地方、大飯郡）
滋賀県	キテン（全域）、テンコチ（彦根市、神崎郡、愛知郡）	イッタチ（守山市、蒲生郡、愛知郡）、カオミセ（蒲生郡）、テンコチ（彦根市、愛知郡、蒲生郡、犬上郡、神崎郡）
京都府	テン（各地）	イッタチ（各地）、キチキチネズミ（各地）、ケチ（丹波地方、京都市、他各地）、トマス（丹波地方、京都市、他各地）
大阪府	キテン（各地）、コテンコ（各地）、テン（堺市）、テンカ（各地）、トマコ（各地）	アカウマ（豊能郡）、イサコ（各地）、イタヅリ（西部）、イッタチ（各地）、オニイタチ（各地）、カイコキツネ（各地）、キチキチネズミ（北部）、コトコト（各地）、サンタチ（南河内郡）、スイザル（各地）、チカメ（各地）、トマイッタチ（各地）、トマコ（各地）、トンバ（各地）、ヒチビシヤ（各地）、ミゾイタチ（各地）
奈良県	テン（吉野郡）	イッタチ（御所市、宇陀郡、吉野郡、添上郡）、キチキチ（生駒郡）、マンク（磯城郡、高市郡）
和歌山県	ギス（各地）	イッタチ（各地）
兵庫県	ミヤイタチ（淡路島）	イタチ（淡路島、氷上郡）、イタツツアン（淡路島）、カマス（氷上郡）、カントクサン（佐用郡）、キッチ（氷上郡）、ケチ（氷上郡）、ツーキリ（各地）、テン（姫路市、飾磨郡、氷上郡）、トココ（淡路島）、トマ（但馬地方）、トマス（但馬地方、丹波地方）、ミチキリ（各地）
香川県	テン（各地）、トマコ（各地）	イタチ（各地）、イッタチ（各地）、エタチ（東部、三豊郡）、エッタチ（西部、与島、栗島、坂出市、善通寺市、観音寺市、綾歌郡、三豊郡、仲多度郡）、トマ（三豊郡）、トマコ（東部、各地）、トマサコ（綾歌郡）、トマス（綾歌郡）、ヒガン（各地）
徳島県	記載無し	トマコ（各地）、ヒガン（各地）
愛媛県	オサコ（温泉郡）、トマ（周桑郡）、トマサコ（新居郡）、ムジナテン（北宇和郡）	イタチ（大三島、西条市、新居浜市、新居浜郡）、エッタチ（各地）、オサコ（各地）、サコ（各地）、トマ（上浮穴郡、北宇和郡）、ヒガン（各地）、ヤブイタチ（大洲市；メスに対して）

高知県	トマコ (各地)	イタチ (全城)、ケトマ (高知市、土佐市、香美郡、土佐郡、幡多郡)、トマ (土佐市、南国市、香美郡、高岡郡、長岡郡)、トマコ (沖ノ島、室戸市、土佐清水市、香美郡、高岡郡、幡多郡)、ヒガン (高知市)
岡山県	キーテン (北部)、キーテンコ (北部)、コンコンイタチ (阿哲郡)、テン (各地)、テンコ (阿哲郡)、テンコイタチ (阿哲郡)、テンコー (阿哲郡)、テンゴ (葦山高原、真庭郡)、テンコロイタチ (岡山市)、ドロテン (阿哲郡)	イターチ (上房郡、邑久郡)、イタチ (各地)、ミアゲ (真庭郡)、ミズイタチ (阿哲郡)、ミヤゲ (葦山郡、真庭郡)、ヤブイタチ (阿哲郡)
広島県	キンテン (豊田郡)、テンゴ (庄原市、甲奴郡、比婆郡)、トロテン (賀茂郡)、ドロテン (御調郡、世羅郡、豊田郡)、ヒテン (世羅郡、豊田郡)	ケス (広島市、安芸郡、山県郡、備後地方)、ズイドークグリ (広島市、安芸郡)、テンゴ (各地)
鳥取県 島根県	テンカ (各地)、デンカー (各地)、テンガメ (西伯郡、日野郡)、テンギア (各地)、テンゴ (各地)、キクテン (各地)、キテンガ (各地)、テンカ (各地)、テンガ (各地)、テング (各地)、テング (飯石郡)、テンゴ (各地)、トマス (各地)、メバオシキ (各地)	イタツ (各地)、エタチ (各地)、エタツ (各地)、オトマ (八頭郡)、チーチー (鳥取市)、ソーキリ (各地)、トマ (各地)、ハナクロ (倉吉市)
山口県	テンク (柳井市)、テンクロー (柳井市)	エタチ (出雲地方、隠岐諸島、八束郡、簸川郡)、ケチ (鹿足郡、美濃郡)、トマ (鹿足郡; メスに対して)、トマス (鹿足郡; メスに対して)
福岡県 佐賀県 長崎県(対馬以外)	キンテン (各地)、ヒワ (各地) 記載無し テン (長崎市)	テン (長島)、トマス (宇部市、阿武郡)、トマス (戸濃郡; メスに対して) トマ (各地) 記載無し イタチ (各地)、ユータツ (五島列島、福江市、南松浦郡)、ユタチ (平戸市、北松浦郡)、ユタツ (五島列島、南松浦郡)、ユタテ (壱岐島)
長崎県・対馬	ワタボウシ、ワタボウシカブリ (伊澤雅子私信)	イタチ (シベリアイタチに対して。伊澤雅子、私信)
大分県	記載無し	イタテ (大分市、大分郡、北海部郡)、ミチキリ (大分市)
熊本県	キンテン (阿蘇郡、葦北郡、球磨郡)、シュステン (球磨郡)、テン (球磨郡)、テンゴロ (玉名市、玉名郡、菊池郡、鹿本郡)	イタチ (玉名郡)、トマ (葦北郡、球磨郡、八代郡)、トマキチ (球磨郡)、ユワシ (八代郡)
宮崎県	テンクロー (各地)、メメヨシ (宮崎市、宮崎郡)、メメンキュ (宮崎市、宮崎郡)	メメヨシ (都城市、北諸県郡)。以下イタチ類として。イタツ (小林市、都城市)、トコサマ (各地)、トマ (小林市、西諸県郡)、トマコ (各地)、トマサコ (小林市、西諸県郡、東臼杵郡)、メメタン (宮崎市、宮崎郡)、メメヨシ (宮崎市、宮崎郡、串間市、都城市、東諸県郡)、メメヨシ (都城市、北諸県郡; メスに対して)、メメンキュ (宮崎市、宮崎郡)、ユタ (都城市、北諸県郡)、ユタテ (串間市、都城市、北諸県郡)
鹿児島県	チ (肝属郡)、チェン (各地)、チッノコ (各地)、テ (鹿児島市)、メメシャ (川辺郡)	イタチツ (各地)、イタツ (曾於郡)、イタツゴロ (各地)、イタツジョ (阿久根郡)、イタテ (大隅地方、屋久島、曾於郡)、イタテン (肝属郡)、ケチロ (川内市)、チノコ (各地)、テーゴイ (甑島)、テーゴゼ (甑島)、テーゴデー (甑島)、テン (川辺郡)、トマ (各地)、トマース (甑島)、トマス (上甑島)、トンマース (甑島)、トンマス (甑島)、ユタ (各地)、ユターチ (種子島)、ユタチ (種子島)、ユタチュ (川辺郡)、ユタツ (各地)、ユタテ (大隅地方、国分市、枕崎市、肝属郡)、ユタデー (各地)、ユタテン (曾於郡)、メメ (曾於郡; メスに対して)、メメッソ (国分市; メスに対して)

対馬以外の方言は白井 (2000-2005) に基づく。

これは「(強い) イタチ (木曾義仲) がいなければ (弱い) テン (新宮十郎行家) が威張り出す」ということの比喩的な描写である。しかし、ニホンテンはニホンイタチよりも大きく (OHDACHI *et al.* 2010)、物理的に格闘した場合は通常はニホンテンのほうが強いと思われる。つまり、「鼬」(イタチ) が「貂」(テン) よりも強いという記述には違和感がある。しかし、13世紀の京都ではニホンイタチのことを「貂」、ニホンテンのことを「鼬」と書き表すこともあったならば、「鼬のなき間の貂誇り」との表現は理解できる。

また『源平盛衰記』の「鳥羽殿鼬の沙汰の事」にも、法皇の御所に「鼬」が出没したとの記述 (五月十二日の午刻に、赤く大なる鼬の、何くより来り参りたり共、云々) がある。この記述における「鼬」の身体的特徴 (赤くて大きい) から、これはニホンイタチではなく夏毛のニホンテン (キテンといわれる色彩タイプ) を示していると思われる。ニホンテンとイタチ (現在は在来種ニホンイタチは、ほぼ外来種シベリアイタチに置き換わった) は現在でも京都市街地で両者がしばしば観察される (川道武男 私信)。

以上のことから平安・鎌倉時代の京都では、現代の標準語とは逆に、大型のイタチ科動物をイタチ、小型のものをテンと曖昧に呼び分け、両者の厳密な区別はしていなかったことが示唆された。

以上のようにニホンテンとニホンイタチは平安時代初期から現代にかけて混称ないし混同される傾向があり、また「読み」と漢字の対応関係の逆転が時代、地方によって起こることが示された。

4.2. アジア東部におけるキエリテンの呼称

現代中国語 (普通話) ではキエリテンは「青鼬」、「黄喉貂」と書き表され、広東語では「喜瑪拉雅貂」(ヒマラヤテンの意) と呼ばれる。また、中国の明代の本草学の集大成の『本草綱目』(李 1993) の「鼬鼠」の身体的特徴の説明に「状似鼠而身長尾大黄色帶赤」(体が長く尾が大きくて黄色に赤を帯びている) とある。この身体的特徴から明代の中国における「鼬鼠」はイタチ属の動物 (*Mustela* sp.) ではなくキエリテンのことを示している可能性が非常に高い。一方、清朝の漢語／満洲語／モンゴル語／チベット語／ウイグル語の対応を表した『五體清文鑑』(田村ほか 1966) の用法によれば、19世紀末期頃まではキエリテンは「蜜鼠」と呼ばれていた。これは『五體清文鑑』の漢語の蜜鼠に対応する満洲語のkharsa/harsaが、ロシア語のkunitsa (куница) に対応すること (Цинциус 1975-77) により、このように同定した。もっとも現代ロシア語ではキエリテンはkunitsa (クーニツァ) ではなくkharza (ハルザ) と呼ばれており (表4)、kunitsaはテン類一般を表す単語である。ツングース諸語の満洲語、オロチ語、ナナイ語ではkharsaとその類似単語 (kharsa類似単語と仮称) で呼ばれる。一方、エヴェンキ語ではkujaale、ウデヘ語ではkaiと呼ばれている (表4)。モンゴル語ではキエリテンはsuoserと呼ばれる (表4)。また、チュルク諸語のウイグル語ではbulgan類似語が使用されている (表4)。ただし、ウ

イグル語圏にはキエリテンは分布していない。現代のチベット語ではnasong、清朝時代のチベット語では漢語の「蜜鼠」の直訳のsbrang byi (ダンチ) ないしbarang jiと呼ばれている(表4)。韓国語ではterjuk-dambi (大陸貂の意)、北朝鮮語ではsandal (山獺の音写と思われる) と呼ばれている。ベトナム語やマレー・インドネシア語では小型肉食類を表す単語に修飾語をつけて呼ばれている(表4)。またタイ語では、キエリテンはmāa-māai (マーマイ; 木の犬の意) と呼ばれている(表4) が、このことは4.4節で、再度言及する。

4.3. マツテン／ムナジロテンの呼称

チュルク諸語のカザフ語やチュバシ語の範囲にはマツテンが分布しているが(図3)、これらの言語ではマツテンはそれぞれorman susary, varman sasaryenと呼ばれている(表5)。またウイグル語圏にはムナジロテンが生息しており(図4)、ウイグル語ではyaq tush bolghunとbulgan類似語に修飾語をつけて呼ばれている(表5)。アナトリアにはクロテンは分布しないが、マツテンとムナジロテンの2種が分布しており(図3、4)、現代トルコ語ではそれぞれ、ağaç sansari, kaya sansariないしsansarと呼ばれている(表5)。以上、ウイグル語を除くチュルク諸語では、マツテンとムナジロテンはsansari, sansar, sasaryen, susaryなどの単語(sansar類似単語と仮称)で呼ばれている。

チュルク系民族の居住地といわれるモンゴル高原(譲 1976; 小松 2000)にはムナジロテンが分布しているが(図4)、現在この地域に居住している主な民族であるモンゴル人はムナジロテンのことをchuluun suusarと呼んでいる(表5)。また、モンゴル語圏最東部に生息するキエリテンはsuoserと呼ばれている(表4)。つまりモンゴル語ではクロテンはbulganで、その他のテン類はsuusarないしsuoserと呼ばれている。

フィン・ウゴル系民族の居住地にはマツテンとムナジロテンが分布している(図3、4)。フィン・ウゴル諸語の祖語ではテン類を含む中小型肉食類はnúkšeと呼ばれていたと推定されている(小泉 1991)。現代のフィン・ウゴル諸語では、マツテンとムナジロテンは、neeti, näätä, nugis, nyusztなどのnúkšeを推定祖形(小泉 1991)とする単語(núkše類似語と仮称)及びそれに修飾語をつけた単語で呼ばれている(表5)。ポチャーク語やコミ語のクロテンを示すniz類似語(表2)もnúkšeから派生した単語である(小泉 1991)。例外はマツテンを表すエルジャ語のchinyemyeである。

イランにはマツテンやムナジロテンが分布しており(図3、4)、ペルシャ語ではそれぞれsamūr-e jangali (森のクロテン)、samūr-e sangi (石のクロテン) /samūr-e kūhi (山のクロテン) と呼ばれている(表5)。またイタチ科のカワウソ *Lutra lutra* (Linnaeus, 1758) もsamūr-e abi (水のクロテン) と呼ばれる(他にshang-eとも呼ばれる)。つまりこれらテン類やカワウソは、現在クロテンを表すsamūrに修飾語をつけて呼ばれている。一方、ペルシャの地にクロテンは生息していない(図1)。つまりsamūrという単語は他の動物の呼称から転換した可能性がある。

大館大学 ユーラシアの諸言語におけるクロテンおよび関連種の呼称リスト

表4: キエリテンの分布域における名称. Words for the yellow-throated marten in its range.

語群、語系等 language group	言語 language	拡張ローマ字表記 ^a extended Roman character	原著表記 ^b original character	備考 note	出典 ^c source
シナ語派 Sinitic	現代標準中国語 modern standard Chinese	qīng yòu, huáng hóu diǎo	青鼬, 黄喉貂	青鼬が標準学術用語	[3,82]
	中国語 (18世紀後半) standard Chinese in late	mí shǔ	蜜鼠	「五體清文鑑」での用法	[5]
	明代漢語 (Chinese in the Ming Dynasty)	yòu shǔ(?)	蜜鼠(?)	「本草綱目」での用法。確実に キエリテンとは同定はできない が可能性は高い。	[1]
	広東語 Yue Chinese or Cantonese	wòng hòu diǎ, hémaālā ainga diū	黄喉貂, 喜瑪拉雅貂	ヒマラヤテン	[83]
チベット・ビルマ語 派 Tibeto-Burman	チベット語 Tibetan	nasong, sbrang byi/barang ji	省略	後二者は「五體清文鑑」での 用法。対応する漢語は蜜鼠。 sbrang=蜜、byi=鼠。 ダンチと発音。 shing saamはムナジロテンも示 す (tree otter という意味) ムナジロテンとの混称	[5,84]
	ゾンカ語 Dzongkha	hachudongka, hachu ney ney, shing saam	-		[85]
	ボータニア語 Bhotia	shungsam	-		[86]
	ナガ語 Naga タイ語 Thai	suchuyokai māa-māai	มูนาไม	ムナジロテンとの混称 māa=dog, māai= tree. 富田 (1990) は มูนาไมをblack giant squirrel Ratufa bicolor (gigantea) のこととしている が、Duengkae (1998) やタイ語版Wikipediaに よるとこのリスのタイ語名称は พญาแร้ง (phayaa-krarǝŋk-dam) である cây và chồn が小型の肉食類一般 を示す musang=テン tenggorokan=喉, kuning= 最後者はインドネシア語からの 借用 テリュクダンビ (大陸貂)、テ リュクモクトリダンビ (大陸襟 巻貂) 「山獺」の音写と思われる	[86] [87,88,89]
オーストロアジア語 族 Austro-Asiatic オーストロアジア語 族 Austronesian	ベトナム語 Vietnamese	cây vàng, cay mac, chon vang, chon macet	-		[90]
	インドネシア語 Indonesian	musang tenggorokan kuning	-		[91]
	マレー語 Malay	mengkira, pulasan akar, musang tenggorokan	-		[92]
	韓国語 South Korean	terjuk-dambi, terjuk- mokdori-dambi	대륙담비, 대륙목 도리담비		[93]
不詳 (アルタイ 系?) not detemined (Altaic?)	北朝鮮語 North Korean	sandal	산달		[14]
	エヴェンキ語 Evenki	kujaale	kyjālə	対応するロシア語はкуница	[25]
	ナナイ語 Nanai	kharsaa/karsa	харса/kapca	対応するロシア語はкуница	[25]
	満洲語 Manchurian	kharsa/harsa	харса	対応するロシア語は「蜜鼠」	[5,25]
ツングース諸語 Tungusic languages	オロチ語 Orochi	khasa	xaca	対応するロシア語はкорсак (steppe fox Vulpes corsac) もしくはкуница	[25,94]
	ウデヘ語	kai	ka ^h и	対応するロシア語はкуница	[25]
	モンゴル語 (18世 紀) Mongolian in late 18c.	suoser	-	「五體清文鑑」での用法。 対応する漢語は「蜜鼠」	[5]
	近代ウイグル語 (18世紀) modern Uyghur in late 18c.	(osli bulgan)	-	「五體清文鑑」での用法。 対応する漢語は「蜜鼠」。 ウイグル語圏には分布しない。	[5]
印欧系言語 Indo- European languages	スラブ語派 Slavic	ロシア語 Russian	kharza	ロシア人の原住地にはいない	[54]
	インド語派 Indo- Aryan	ネパール語 Nepalese	malsapra, kukhauri, mal shamproo		[95]

- a) 近い音価を持つローマ字を便宜的に当てはめた場合もある c) 数字は付記の出典リストに対応
b) アラビア文字系単語は全て独立形の文字

ヨーロッパではマツテンやムナジロテンが広く分布しているが(図3、4)、スラブ諸語、バルト諸語、バルカン地域、コーカサス地域ではこれら2種はkuna類似語で呼ばれる場合が多い(表5)。一方、古代ロシア(ルシ)では、テン類の毛皮をkuna(クナ)ないしkun(クン)という単位(本来はテンの毛皮という意味)で数え、銀貨幣との交換単位として使っていた(日本古代ロシア研究会 1987)。また南スラブ地域やコーカサス地方では、マツテンとムナジロテンはkuna類似語単独の他に、それにzlatkaないしbyelkaなどの単語と組み合わせて呼ばれている(表5)。

ヨーロッパ北部から西部にかけては、marten、mård、marder、martaなどのmarten類似語は、ゲルマン諸語・イタリック諸語ともにマツテンを表す単語に使用される場合が多い(表5)。一方、ムナジロテンはイタリック諸語ではfaina、fouineなどの単語(foina類似語と仮称)で呼ばれる場合が多いが、ゲルマン諸語ではマツテン同様にmarten類似語で呼ばれる場合が多い(表5)。

4.4. テン類とリス類の混称

テンやイタチの仲間(イタチ科Musitellidae)は現代の動物分類学では食肉目(Carnivora)に含まれる。一方、リス科やネズミ科(Muridae)は齧歯目(Rodentia)に属し、イタチ科とは全く別の分類群である。しかし、リンネ式分類体系の導入以前の東アジア文化圏では、テンやイタチはネズミ科やリス科とともに、「鼠類」に分類されていた(『本草綱目』(李 1993)など)。「貂」は「貂鼠」とも呼ばれ、また「栗鼠」は「貂」の別名と解釈される場合もあった。18世紀の日本の百科事典の『和漢三才図会』(寺島 1906)では、「栗鼠」と「貂」は、長らく混同されていたが、同類ではあるが別の種類ではないか、と記載していることから、江戸時代後期の学者に至ってようやくテンとリスは異質な動物であると認知されたようである。このリスとテン・イタチに対する東アジアの本草学による分類の根拠は、テン類・リス類ともに、たくみに木に登り、房状の毛のある長い尾をもち、どちらも小型毛皮獣として利用されていたためであろう。

またドイツ語-満洲語の辞典(WALRAVENS & GIMM 1978)では、テン類を示すドイツ語Marder(原著の括弧内にはWiselとあるがこれはイタチ科のMustela属を示す言葉である)に対する満洲語には2つあり、1つはjelken(金鼠)、もう1つはulfu(栗鼠)である(括弧内の漢字は原著による)。前者(jelken)は、ロシア語のgornostaj(горноста́й)、つまりイタチ科の小型獣のオコジョ *Mustela erminea* Linnaeus, 1758のことである(Цинцинус 1975-77)(原著ではзэлкэн)。後者(ulfu, улху)は、ロシア語のbyelka(белка)つまりリスにあたるとされる(Цинцинус 1975-77)。また、マツテンを表すアラビア語もal-sinjāb al-ašīl(表5)、つまり「本当のリス」という意味であり(守川知子氏によればsinjāb=リスはペルシャ語起源)、マツテンはリスを示す単語に修飾語を付加して呼ばれている。また4.2節で述べたように、タイ語では、キエリテンを表す単語はmāa-māaiであるが(表4)、

表5: マツテンおよびムナジロテンの生息地における名称, 出典リストは付記に示す。Words for the pine marten and the beech (stone) marten in their ranges.

マツテン <i>Martes martes</i>		ムナジロテン <i>Martes foina</i>			
語群, 語系等 language group	言語 language	拡張ローマ字表記 ^a extended Roman character	原著表記 ^a original character	備考 note	出典 ^b source
シナ語派 Sinitic	現代標準中国語 modern standard Chinese	-	-	not distributed	-
	チベット・ビルマ語派 Tibeto-Burman	-	-	not distributed	-
	ボータイ語 Bhotia	-	-	not distributed	-
	ナガ語 Naga	-	-	not distributed	-
モンゴル諸語 Mongolic	現代モンゴル語 modern Mongolian	-	-	not distributed	-
	現代トルコ語 (トルコ共 和国) modern Turkic	(ojn susar)	(ojn cyscap)	not distributed. 参考 までにあげた	[29]
	agac sansari	-	-	not distributed	[96]
	varman susaryen orman susary (nukse)	varman susaryen orman cysap	-	-	[94] [40]
フィン・ウゴル語 派 Finno-Ugric	ウラル語 Uralic	neeti	-	テン (<i>Martes</i> sp.) 類 を示す。 ネーティ	[41]
	フィンランド語 Finnish (Suomi)	nealti	-	ネアハティ	[41]
	エストニア語 Estonian	niitää	-	ナータ	[96, 98]
	メスニギス metsnugis	-	-	テン類を示す単語は nugis (スギス)。 ノクス	[96]
不明 not セム語派 Semitic	ヴォグ (マニシ) 語 Vogal (Mani)	foks	-	-	[40]
	ハンガリー (マジャール) 語 Hungarian	nyuszt	-	-	[96]
	エルジャ語 Erzya	chinyemye	chimese	-	[99]
	バスク語 Basque	lephahoria	-	-	[100]
印欧系言語 Indo-European	標準アラビア語 standard Arabic	al-sinjāb al-ʿasil	省略	sinjab=リス, asil=純粋 な、真の。	[101]
	ヒンディー語 Hindi	-	-	not distributed	-
	サムール・ジャंगリ samūr-e jāngali	-	-	not distributed	-
	ガルワール語 Garhwali	-	-	not distributed	-
イラン語派 Iranian	ネパール語 Nepalese	qtis kverna	سور جنگلی	not distributed	[102] [103] [51]
	現代ペルシアン語 modern Persian	kunadhja	دژول ځنگلي	not distributed	[96]
	クルディッシュ語 Kurdish	gushveverdie, zardafi	δεντροκονοναβο	not distributed	[96]
	グルジア語 Georgian	hyesayza, kunisa, zhyvetodushka	лесная куниса, желтолушка	not distributed	[96]
南コーカサス諸群 South Caucasian	アルバニア語 Albanian	-	-	森の貂 желто=黄色い	-
	現代ギリシア語 modern Greek	-	-	森の貂 желто=黄色い	-
	東スラブ語群 East Slav	-	-	森の貂 желто=黄色い	-
	ロシア語 Russian	-	-	森の貂 желто=黄色い	-

ウクライナ語 Ukrainian	ウクニツヤ イソバ kunitsya isova	ウクニツヤ 漆色 kunitsya lacosa	[55]	ウクニツヤ カミ'ヤナ, 白頭鹿 kunitsya kam'jana, bieloduska	[55]
ポーランド語 Polish	kuna leśna	-	[96]	kuna domowa	[96]
チェコ語 Czech	kuna lesní	-	[96]	kuna skobí	[96]
スロバキア語 Slovak	kuna lesná	-	[96]	kuna skobá	[96]
ブルガリア語 Bulgarian	zlatka	златка	[96]	byelka	[96]
セルビア・クロアチア 語 Serbo Croatian	kuna zlatica	куна златица	[60, 96]	kuna bjelica	[60, 96]
マケドニア語 Macedonian	kuna zlatka	куна златка	[96]	kuna bjelka	[96]
スロベニア語 Slovene	kuna zlatica	-	[96]	kuna belka	[96]
ラトビア語 Latvian	meša cauna	-	[96]	akmenis cauna	[96]
エストニア語 Estonian	miskine kiauņē	-	[96]	akmenis kiauņē	[96]
リトアニア語 Lithuanian	kiauņė	-	[105]	不明 unknown	[96]
スウェーデン語 Swedish	mard	-	[96]	sternmården	[96]
デンマーク語 Danish	skovmar	-	[96]	husmar	[96]
ノルウェー語 Norwegian	mår	-	[96]	steinmar	[96]
アイスランド語 Icelandic	(skógarmörður)	-	[96]	(hús mörður)	[96]
アイスランド語 Icelandic	(matur)	-	[96]	(matur)	[96]
アイスランド語 Icelandic	Baumrædd	-	[96]	Steinmædd	[96]
ドイツ語 German	Baumrædd	-	[96]	Steinmædd	[96]
オランダ語 Dutch	Boommorder	-	[106]	steenmorder	[106]
ルクセンブルグ語 Luxembourgish	boommarter	-	[96]	steenmarter, fluwijn	[117]
現代英語 modern English	bëschmarter	-	[96]	steenmarter	[96]
スコットランド語 Scottish Gaelic	pine marten	-	[96]	(beech marten, stone marten)	[74, 96]
イタリア語 Italian	mairtin	-	[107]	不明 unknown	[96]
イタリア語 Italian	martora	-	[96]	faina	[108]
イタリア語 Italian	mararelo	-	[108]	fain	[108]
イタリア語 Italian	不明 unknown	-	[96]	fain	[108]
イタリア語 Italian	marie des pins	-	[96]	fouine	[96]
イタリア語 Italian	不明 unknown	-	[96]	fawene	[119]
イタリア語 Italian	marta	-	[96]	gardufia	[96]
イタリア語 Italian	marta	-	[109]	gardufia	[109]
イタリア語 Italian	fuma de papo	-	[79]	fagina	[79]
イタリア語 Italian	anarello	-	[110]	fuma de papo blanco	[110]
イタリア語 Italian	marta	-	[96]	fainha	[96]
イタリア語 Italian	jderul-de-copac	-	[96]	jderul-de piatra	[96]
イタリア語 Italian	cat crătin	-	[96]	-	[96]
イタリア語 Italian	kayt ny millyn	-	[111]	-	[111]
イタリア語 Italian	bele	-	[112]	-	[112]
イタリア語 Italian	mart boutin, mart ar	-	[81]	不明 unknown	[81]

a) アラビア文字系単語は全て独立型の文字
b) 数字は付記のリストに対応

この単語はクロオオリス *Ratufa bicolor* という大型のリスを示す場合もある (富田 1990)。クロオオリスは木を登る習性、房のある長い尾を持つ事から (FRANCIS 2008)、キエリテンと混称されるのであろう。さらにスラブ諸語のブルガリア語ではムナジロテンを著す単語はロシア語のリスを示すものと同じ *byelka* (белка) である (表5)。このようにユーラシアの広範囲の地域で、テン類ないしイタチ科とリス類は混称されたり、同じ分類カテゴリーに入れられる例が見られた。

さて、池上 (1987: 107-117) は、ツングース諸語におけるリス類などの動物に対する単語では、エヴェンキ語では *ulkii*、オロチ語では *oloki* と接尾辞に *-kii* や *-ki* がつくことを指摘し、日本の古語「フルキ」との関連を示唆した。そこで、さらに詳しく調べてみると、ツングース諸語でリス類 (ロシア語の *byelka*、белка) を表す単語は、以上の他に、エヴェンキ語で *oliki*、*uliki*、ソロン語で *ulukhi*、ウリチ語では *kholo*、ナナイ語では *khulu*、*uluki*、*khulukse*、満洲語では *ulkhu*、ウデヘ語で *olokhi* などの類似した単語 (*uluki* 類似語と仮称) が使われている (表6)。さらに語頭に *kh-* が付く例も散見され、これも「フルキ」の呼称と関連があるかもしれない。

表6: ツングース系言語でのリスを示す名称. Words for squirrels in Tungusic languages.

言語 language	ローマ字表記 Roman character	原典表記 original description	出典 ^{a)} source
エヴェンキ語	<i>ulkii</i> , <i>ulukii</i> se,	улакй, улакйкэс, улакйиэ	[25]
エヴェン語 Even	<i>oliki</i> , <i>uuliki</i> , <i>uliki</i> , <i>ul'ki</i>	олки, у́лкі, улики, ул'ки	[25]
ソロン語 Solon	<i>ulukhi</i>	улухи	[25]
ネギダール語 Negidal	<i>olokhii</i> , <i>olukii</i> , <i>elukhki</i>	олохйй, олукий, элухи	[25]
ナナイ語 Nanai	<i>khulu</i> , <i>uluki</i> , <i>khulukse</i> , <i>khulukhse</i>	хулу, улуки, хулу́кэс, хулу́хэс	[25]
ウリチ語 Ulchi	<i>kholo</i>	холо	[25]
ウイльта (オロツコ) 語 Uilta (Orok)	<i>kholo</i> , <i>kholu</i>	холо, холу	[25]
満洲語 Manchurian	<i>ulkhu</i> , <i>ulhu</i> , <i>ulfu</i>	улаху	[5, 25, 26]
オロチ語 Oroch	<i>oloki</i>	олоки	[25]
ウデヘ語 Udeghe	<i>olokhi</i>	олохи	[25]

a) 番号は付記の出典リストに対応

一方、日本周辺の他の言語では、現代中国語ではリス科は松鼠 (*sōng shǔ*) と呼ばれる (SMITH & XIE 2008)、本草学における漢語では、栗鼠 (*lì shǔ*)、鼯鼠 (*shí shǔ*) など (寺島 1906) と呼ばれている。韓国・朝鮮語では、キタリス (*Sciurus vulgaris* Linnaeus, 1758) ないしリス (*Sciurus* sp.) は、韓国 (李殷在 私信) では *cheongseolmo* (청설모、チョンソルモ)、北朝鮮 (원 1968) では *cheongseo* (청서、チョンソ; 青鼠) と漢語由来の単語で呼ばれている。古代朝鮮語ではなんと呼ばれていたかは不明である。日本語の「リス」は漢語の栗鼠 (*lì shǔ*) の音写であり (寺島 1906; 木村 1989; 吉田 2001)、はっきりしたヤマト言葉は不明である。キタリスは北海道のアイヌ語では *tusúnike*、*níow*、*iwóttusukur*、*wémpe* など、樺太のアイヌ語では *róxse* などと呼ばれる (知里 1962)。また、モンゴル語 (ハルハ語) では *kherem* (хэрэм) と呼ばれている (Igor' MOROLDOEV 私信)。以上の単語は「フルキ」との明かな関連はないようである。

5. まとめ

クロテンが生息する(した)地域では、クロテンは、アイヌ語ではhoinu類似語、ニブヒ語ではogfrof類似語ないしlumr、朝鮮語ではdambiなど、モンゴル諸語はbulgan類似語、ツングース諸語ではsegep類似語、チュルク諸語はkish類似語、フィン・ウゴル諸語ではnukše類似語、その他のシベリア諸民族では多様な単語で、ロシア語ではsobol' と呼ばれることが多い。またクロテンの生息していない地域でのクロテンの呼称は、漢語では修飾語を伴ったdiāo (貂)で呼ばれ、西進したチュルク諸語ではペルシャ語起源のsamurあるいはロシア語のsobol' を使用している。同じくクロテンの生息しない日本の本土地域では、クロテンは古代にはフルキ、中世以降は漢語由来の呼称で呼ばれている。ユーラシア西方では、スラブ地域、北・西ヨーロッパではsobol類似語が卓越している。アラビア語や、南スラブ地域、バルカン半島、コーカサス地方の言語ではsamurが用いられる場合が多い。また、日本(本土地域)においては、ニホンテンとニホンイタチは混称される傾向にあった。またユーラシア各地において、テン類とリス類が混称される例がいくつか見つかった。特に日本の古語のフルキはツングース諸語のリスを示すuluki類似語と似ていることは注目に値する。

6. 謝辞

ツングース諸語については津曲敏郎とAlbina Girfanova、ニブヒ語については齋藤玲子、チュルク諸語・ソグド語は吉田豊、モンゴル諸語はIgor' Moroldoev、ペルシャ語・アラビア語は守川知子、チベット語は星泉、貢嘎(Gongga)(西藏大学農牧学院動科院)と高建君(Gao Jian-jun)、韓国語は李宇新(LEE Woo-shin)と李殷在(LEE Eun-jae)、西夏語は荒川慎太郎、旧ソ連邦での名称についてはBoris Sheftel, Alexei V. Abramov, Nikolai E. Dokuchaev及び藤巻裕蔵、チェコ・スロバキア語についてはJaroslav Pavelka、タイ語についてはBoripat Siriaronrat、インドネシア語についてはAwit Sutito (Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences)、マレー語についてはShukor (Faculty of Science and Technology, Universiti Kebangsaan Malaysia) および佐々木浩、フィン・ウゴル諸語は水本秀明とIlmari Mattus、対馬方言については伊澤雅子、の各氏より多大な情報をいただいた。また保尊脩氏には全国の方言についての文献調査に協力いただいた。Heikki Henttonen氏にはフィンランドにおけるクロテンの分布の情報を提供いただいた。川道武男氏には京都市内におけるテンとイタチの分布状況についての情報をいただいた。辻野亮、鈴木まほろ、佐伯緑、本川雅治、八條忠基、河井大輔の各氏には文献のご教示をいただいた。深澤秀夫、菊澤律子、守川知子、蓑島栄紀、湯本貴和の各氏には初期の原稿についてコメントもいただいた。特に、菊澤津子、深澤秀夫の各

氏からは批判的コメントをいただいたが、その指摘を反映していない箇所もある。従って本論文についての責任は一切私にある。また北海道立北方民族博物館研究紀要の編集員の方々には本論執筆に際し数々のご助言をいただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

引用文献

池上二良

- 1987 「北方言語と日本語の古層（日本語とツングース語の関係の探索）」『月刊言語』
16：104-117

上田雄

- 2004 『渤海国 東アジア古代王国の使者たち』講談社：東京

大館大學

- 2011 「東アジアにおけるクロテンの皮衣—特に古代日本の「ふるきのかわぎぬ」の実像をめぐって」 養島栄紀編『アイヌ史を問いなおす 生態・交流・文化継承』
pp.161-177, 勉誠出版：東京

大谷恒彦

- 1981 『現代訳 東韃紀行（原著：間宮林蔵）』教育社：東京

大塚和義

- 2003 「北太平洋の先住民交易とその歴史的意義」大塚和義編『北太平洋の先住民交易と工芸』pp.5-16, 思文閣出版：東京

海保嶺夫

- 2000 「アイヌ民族の交易形態と貂の役割—1696年、蝦夷地に漂着した朝鮮人の史料より—」北海道開拓記念館編『北の文化交流史研究事業研究報告』pp.255-268, 北海道開拓記念館：札幌

鎌田正・米山寅太郎

- 2002 『新版 語林第二版（第2刷）』大修館書店：東京

菊池俊彦

- 2003 「環オホーツク海のセイウチの牙交易」大塚和義編『北太平洋の先住民交易と工芸』pp.134-138, 思文閣出版：東京

木村盛武

- 1989 『野生の事件簿—北の動物たち』北海道新聞社：札幌

國史大系編修會（編）

- 1966 『新訂増補國史体系2巻 続日本紀』吉川弘文館：東京

小泉保

- 1991 『ウラル語のはなし』大学書林：東京

小西友七・南出康世

2001 『ジーニアス英和大辞典』大修館：東京

小松久男（編）

2000 『中央ユーラシア史』山川出版社：東京

近藤瓶城（編）

1901-02 『改定史籍集覧．参考源平盛衰記』近藤出版部：東京

下山晃

2005 『毛皮と皮革の文明史 世界フロンティアと略奪のシステム』ミネルヴァ書房：東京

坂本勉

1996 『トルコ民族主義』講談社：東京

佐々木史郎

1996 『北方から来た交易民一絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会：東京

2006 「サンタンとスメレンクル-十九世紀の北方交易民の実像」天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容-中世の北東アジアと日本列島』pp.12-55, 山川出版：東京

シャフクノフ, E. V.

1992 「北東アジア民族の歴史におけるソグド人の黒貂の道」(鈴木朋美・海保嶺夫訳) 北海道開拓記念館編『1992年度 北の歴史・文化交流研究事業．中間報告』pp.93-100, 北海道開拓記念館：札幌

白井祥平（監修）

2000-2005 『全国方言集覧．動植物標準と名→方言名検索大辞典 第1期-7期』太平洋資源開発研究所：太平洋資源開発研究所（生物情報社）

高瀬克範

2009 「皮革利用史の研究動向—皮革資源への「複眼的」接近のために—」『日本古代学（明治大学）』1:81-106

竹内和夫

1996 『トルコ語辞典』（改訂増補版）大学書林：東京

田村實造・今西春秋・近藤長

1966 『五體清文鑑譯解』京都大學文學部内陸アジア研究所：京都

知里真志保

1962 『分類アイヌ語辞典（第2巻 動物篇）』日本常民文化研究所：東京

寺島良安

1906 『和漢三才図会』（復刻版）吉川弘文館：東京

出利葉浩司

2002 「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について」佐々木史郎編『開かれた

- 系としての狩猟採集社会』 pp.97-163, 国立民族学博物館：大阪
- 富田竹二郎
- 1990 『タイ日辞典・改定版』養徳社：天理
- 新村出（編）
- 1998 『広辞苑 第五版』岩波書店：東京
- 西村三郎
- 2003 『毛皮と人間の歴史』紀伊國屋書店：東京
- 日本古代ロシア研究会（註訳）
- 1987 『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会：名古屋
- 濱田耕策
- 2000 『渤海国興亡史』吉川弘文館：東京
- 藤東明保・松本昭・竹田晃
- 1993 『漢字源（JIS漢字版）』学習研究社：東京
- 正宗敦夫（編）
- 1928 『重訂本草綱目啓蒙』（日本古典全集）日本古典全集刊行會：東京
- 1933 『本朝食鑑』（日本古典全集）日本古典全集刊行會：東京
- 1954 『倭名類聚鈔』（複製版）笠間書房：東京
- 葦島栄紀
- 2005 「平安期貴族社会とサハリンのクロテン」『北方島文化研究』3:35-48
- 2006 「史料からみた靺鞨・渤海・女真と日本列島」天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦編
『北方世界の交流と変容-中世の北東アジアと日本列島-』 pp.76-99, 山川出版：
東京
- 森安孝夫
- 2007 『シルクロードと唐帝国』講談社：東京
- 讓雅夫
- 1976 『古代遊牧帝国』中公新書：東京
- 吉田金彦
- 2001 『語源辞典 動物篇』東京堂出版：東京
- 李時珍（編）
- 1993 『本草綱目』（復刻版）科学技術出版社：上海、中華人民共和国
- 원홍구 (元洪九)
- 1968 『조선 짐승류지 (朝鮮の哺乳類)』 과학원 출판사 (科学院出版社)：평壤 (平壤)、
朝鮮民主主義人民共和国
- DROSDOWSKI, G.
- 1989 Duden. Das Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache. Etymologie der

- deutschen Sprache: Dudenverlag
- FRANCIS, C. M.
- 2008 *A Guide to the Mammals of Southeast Asia*. Princeton University Press: Princeton
- HEPTNER, V.G., NAUMOV, N.P., YURGENSON, P.B., SLUDSKII, A.A., CHIRKOVA, A.F., BANNIKOV, A.G.
- 2002 *Mammals of the Soviet Union. Vol. 2. Carnivora (Weasels; Additonal Species)* (Russian original paper was published in 1967). Scientific Publishers: Enfield, NH, USA
- KOEPFLI, K., DEERE, K. A., SLATER, G. J., BEGG, C., BEGG, K., GRASSMAN, L., LUCHERINI, M., VERON, G., WAYNE, R. K.
- 2008 Multigene Phylogeny of the Mustelidae: Resolving Relationships, Tempo and Biogeographic History of a Mammalian Adaptive Radiation. *BMC Biology* 6: doi:10.1186/1741-7007-6-10. PMID 18275614. PMC 2276185
- OHDACHI, S. D., ISHIBASHI, Y., IWASA, M. A., SAITOH, T. (eds.)
- 2010 *The Wild Mammals of Japan*. 2nd printing. Shoukadoh: Kyoto
- SATO, T., AMANO, T., ONO, H., ISHIDA, H., KODERA, H., MATSUMURA, H., YONEDA, M., MASUDA, R.
- 2007 Origins and Genetic Features of the Okhotsk People, Revealed by Ancient Mitochondrial DNA Analysis, *Journal of Human Genetics* 52:618-627
- SATO, T., AMANO, T., ONO, H., KODERA, H., MATSUMURA, H., YONEDA, M., MASUDA, R.
- 2009 Mitochondrial DNA Haplogrouping of the Okhotsk People Based on Analysis of Ancient DNA: an Intermediate of Gene Flow from the Continental Sakhalin People to the Ainu. *Anthropological Science* 117:171-180
- SHAVKUNOV, E. V.
- 1991 New Data Pertinent to Commercial and Business Intercourse between Peoples of Middle Asia and Peoples of Primorye Area along the Sable Road during the Twelfth Century and the First Third of the Thirteenth Century. 北海道開拓記念館編『1991年度 北の歴史・文化交流研究事業. 中間報告』pp.51-55, 北海道開拓記念館: 札幌
- SMITH, A. T., XIE, Y. (eds.)
- 2008 *A Guide to the Mammals of China*. Princeton University Press: Princeton
- TSUMAGARI, T.
- 2010 Long journey of walrus: a linguistic survey. *Journal of the Center for*

Northern Humanities 3:45-57

WALRAVENS, H., GIMM, M.

1978 *Deutsch-Mandjurisches Wörterverzeichnis: (nach H. C. von d. Gabelentz' mand ſchu- deutschem Wörterbuch)*. Steiner: Wiesbaden

ZENKER, J. T.

1979 *Türkisch-arabisch-persisches Handwörterbuch*. 2. Nachdruckauflage. G. Olms: Hildesheim, West Germany

Цинциус, В.И.

1975-77 *Сравнительный Словарь Тунгусо-Маньчжурских Языков : Материалы к Этимологическому Словарю*. Наука: Ленинград (Leningrad), СССР (USSR)

付記：表1～6の文献番号と出典（表での出現順）

1. 李時珍（編）1993 『本草綱目』（復刻版） 科学技術出版社：上海、中華人民共和国
2. Ohdachi, S. D., Ishibashi, Y., Iwasa, M. A., Saitoh T. (edition) 2010 *The Wild Mammals of Japan*. 2nd printing. Shoukadoh: Kyoto
3. Smith, A. T., Xie, Y. (edition) 2008 *A Guide to the Mammals of China*. Princeton University Press: Princeton
4. Gongga (貢嘎) (中国・西藏大学農学院動科院) 私信 (中国・雲南大学生物資源保護と利用重点実験室 高建君博士を通じて)
5. 田村實造・今西春秋・近藤長 1966 『五體清文鑑詳解』 京都大學文學部内陸アジア研究所：京都
6. 源順（正宗敦夫編纂校訂）1954 『倭名類聚鈔』（複製版）. 笠間書房：東京
7. 海保嶺夫 2000 「アイヌ民族の交易形態と貂の役割 -1696年、蝦夷地に漂着した朝鮮人の史料より」 北海道開拓記念館編『北の文化交流史研究事業研究報告』, pp. 255-268. 北海道開拓記念館, 江別市
8. 新村出（編）2002 『広辞苑』（第五版） 岩波書店：東京
9. 日本漢字教育振興会（編）1997 『漢検 四字熟語辞典』（第一版）. 日本漢字能力検定協会：東京
10. 小野蘭山（正宗敦夫編纂校訂）1928 『重訂本草綱目啓蒙』（日本古典全集；第3期）. 日本古典全集刊行會：東京
11. 民衆書林編輯局 1997 『뽕뽕스리韓・韓日辭典（뽕뽕版）』 民衆書林：서울 (ソウル), 大韓民国
12. 韓国のサイト <http://www.animalpicturesarchive.com/animal/SearchName.cgi?qt=art>
13. Lee, Woo Shin (李宇新) 私信
14. 원홍구 (元洪九, Won H.K.) 1968 『조선집승류지』 (朝鮮の哺乳類) 과학원출판사 (科学院出版社): 평양 (平壤), 朝鮮民主主義人民共和国
15. 北朝鮮の動物のウェブサイト <http://www.animalpicturesarchive.com/view.php?tid=3&did=17783&lang=kr>
16. 知里真志保 1962 『分類アイヌ語辞典』（第2巻動物篇）日本常民文化研究所：東京
17. 萱野茂 2002 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂：東京
18. 出利葉浩司 2002 「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について」 佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』, pp. 97-163. 国立民族学博物館：大阪
19. Старостин С.А. 1982 Приенисейская Реконструкция и Внешние Связи Енисейских Языков (Yenisei language). In Алексеев Е.А. Гохман И.И. Иванов В. В. and Топоров В.Н. (eds) *Кетский Сборник. Антропология, Этнография, Мифология, Лингвистика* (Studia Ketica. Physikal Antropology, Etnography, Mythology, Linguistics), pp. 144-237. Наука (Nauka), Ленинград (Leningrad), USSR
20. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. ウェブサイト：北東ユーラシアの言語文化 (<http://www.ling-atlas.jp/>)
21. 高橋盛孝 1942 『樺太ギリヤク語』朝日新聞社：大阪
22. 中目覚 1917 『ニクブン文典』 三省堂：東京
23. Савельева, В. Н., Таксамин, Ч. М. 1970 *Нивхско-Русский Словарь: Свыше 13000 Слов* (Nivhk-Russian dictionary). Изд-во "Советская Энциклопедия": Москва (Moscow), USSR
24. Тавровский, В.А. 1971 *Млекопитающие Якутии* (Mammals in Yakutia). Наука: Москва (Moscow), USSR
25. Цинциус, В.И. 1975-1977 *Сравнительный Словарь Тунгусо-Маньчжурских Языков : Материалы к Этимологическому Словарю*. Наука (Nauka): Ленинград (Leningrad), USSR

26. Walravens, H., Gimm, M. 1978 Deutsch-Mandjuri-
isches Wörterverzeichnis : (nach H. C. von d.
Gabelentz' mandŕchu-deutschem Wörterbuch).
Steiner: Wiesbade, West Germany
27. Гирфанова, А.Х. 2001 Словарь Удэгейского
Языка (Dictionary of Udege Language). Наука :
Санкт Петербург (Sankt Peterburg), Russia
28. 小沢重男 (編) 1994『現代モンゴル語辞典』(改訂
増補版) 大学書林: 東京
29. モンゴル語版Wikipedia. <http://mn.wikipedia.org/wiki/>
30. Moroldoev, Igor' 私信
31. サハ語版Wikipedia. <http://sah.wikipedia.org/wiki/>
32. Sheftel, Boris 私信
33. Clauson, G., Sir 1972 An Etymological
Dictionary of Pre-thirteenth-century Turkish.
Clarendon Press: Oxford
34. チュバシ語版Wikipedia. <http://cv.wikipedia.org/wiki/>
35. Zenker, J. T. 1979 Türkisch-arabisch-persisches
Handwörterbuch. 2. Nachdruckauflage. G.
Olms: Hildesheim, West Germany
36. 竹内和夫 1996『トルコ語辞典』(改訂増補版) 大
学書林: 東京
37. トルコ語版Wikipedia. <http://tr.wikipedia.org/wiki/>
38. ウイグル語版Wikipedia. <http://ug.wikipedia.org/wiki/>
39. Лобачев, Ю. С., Афанасьев Ю. Г. 1982 Соболь
Martes zibellina. In Гвоздев Е. В., Страутман Е.
И. (eds.) Млекопитающие Казахстана. Том 3,
часть 2. Хищные (куньи, кошачьи) (Mammals of
Kazakhstan. Carnivores), pp. 101-119. Наука,
Алма-Ата (Alma-Ata), USSR
40. 小泉保 1991『ウラル語のはなし』大学書林: 東京
41. Mattus, Ilmari 私信 (水本秀明氏を介して)
42. フィンランド語版Wikipedia. <http://fi.wikipedia.org/wiki/>
43. コミ語版Wikipedia. <http://kv.wikipedia.org/wiki/>
44. マジャール語版Wikipedia. <http://hu.wikipedia.org/wiki/>
45. Elias, E. A., Elias E. E. 1983 Elias' Modern
dictionary English-Arabic. 26th edition. Elias'
Modern Publishing House: Cairo, Egypt
46. ヒンディー-英語のウェブ辞書
<http://dict.hinkhoj.com/shabdikosh.php?lang=en&word=sable>
47. ジャーレ・アールズガール, アフマド・タッフアン
リー 1997『パフラヴィー語-その文学と文法-』山
内和也訳. シルクロード研究所: 鎌倉
48. Dehkodā, Alikbar 1998 Loghatnāme (Encyclopedic
Dictionary) (n Persian). Tehran University
Publication: Tehran, Iran
49. ペルシャ語版Wikipedia. <http://fa.wikipedia.org/wiki/>
50. 黒柳恒男 1993『ペルシャ語辞典』(第3版) 大
学書林: 東京
51. グルジア語版Wikipedia. <http://ka.wikipedia.org/wiki/>
52. ギリシャ語版Wiktionary. <http://el.wiktionary.org/wiki/>
53. 木村彰一ほか編 1975『ロシア語辞典』(1991年第1
版13刷). 博友社: 東京
54. 藤巻裕蔵 2008『鳥類・哺乳類ロシア語辞典』極東
鳥類研究会: 帯広
55. ウクライナ語版Wikipedia. <http://uk.wikipedia.org/wiki/>
56. ポーランド語版Wikipedia. <http://pl.wikipedia.org/wiki/>
57. Pavelka, Jaroslav 私信 (Institute of Entomology,
České Budějovice, Czech Republic)
58. Атанасова, Т. 1983 Българско-Английски речник
(Bulgarian English Dictionary). 2nd edition. Наука
и изкуство: Софи (Sofia), Bulgaria
59. ブルガリア語版Wikipedia. <http://bg.wikipedia.org/wiki/>
60. Benson, M. 1971 SerboCroatian-English
Dictionary. University of Pennsylvania Press:
Philadelphia
61. セルビア語版Wikipedia. <http://sr.wikipedia.org/sr/>
62. クロアチア語版Wikipedia. <http://hr.wikipedia.org/wiki/>
63. ラトビア語版Wikipedia. <http://lv.wikipedia.org/wiki/>
64. リトアニア語版Wikipedia. <http://lt.wikipedia.org/wiki/>
65. スウェーデン語版Wikipedia. <http://sv.wikipedia.org/wiki/>
66. デンマーク語版Wikipedia. <http://da.wikipedia.org/wiki/>
67. ノルウェイ語版Wikipedia. <http://no.wikipedia.org/wiki/>
68. アイスランド語版Wikipedia. <http://is.wikipedia.org/wiki/>
69. 相良守峯 1982『新訂独和辞典.』(第21刷) 博友
社: 東京
70. ドイツ語版Wikipedia. <http://de.wikipedia.org/wiki/>
71. オランダ語版Wikipedia. <http://nl.wikipedia.org/wiki/>
72. Oxford English Dictionary Online版. <http://www.oed.com/>
73. 小西友七・南出康世 2001『ジーニアス英和大辞
典』大修館: 東京
74. 英語版Wikipedia. <http://en.wikipedia.org/wiki/>
75. イタリア語版Wikipedia. <http://it.wikipedia.org/wiki/>
76. フランス語版Wikipedia. <http://fr.wikipedia.org/wiki/>
77. 田村毅ほか編 1989『ロワイヤル仏和辞典』(重版)
旺文社: 東京
78. スペイン語版Wikipedia. <http://es.wikipedia.org/wiki/>
79. カタルーニャ語版Wikipedia. <http://ca.wikipedia.org/wiki/>
80. ポルトガル語版Wikipedia. <http://pt.wikipedia.org/wiki/>
81. ブルトン語版Wikipedia. <http://br.wikipedia.org/wiki/>
82. 中国語版Wikipedia. <http://zh.wikipedia.org/zh/>
83. 広東語版Wikipedia. <http://zh-yue.wikipedia.org/wiki/>
84. 彭基泰・鐘祥清 (編) 2005『四川省甘孜藏族自
治州哺乳類野外識別保護手冊』四川科学技術出版
社: 成都、中華人民共和国
85. Wangchuk, T., Thinley P., Tshering, K.,
Tshering, C., Yonten, D. 2004 A Field Guide
to the Mammals of Bhutan. Bhutan Trust
Fundfor Environmental Conservation: Thimpu,
Bhutan
86. Menon, V. 2009 Mammals of India. Princeton
University Press: Princeton

87. Duengkae, P. 1998 Wild Mammals in Thailand (in English and Thai). Office of Environmental Policy and Planning: Bangkok, Thailand
88. タイ語版Wikipedia. <http://th.wikipedia.org/wiki/>
89. 富田竹二郎 1990 『タイ日辞典』(改定版) 養徳社: 天理
90. ベトナム語版Wikipedia. <http://vi.wikipedia.org/wiki/>
91. Pangrango国立公園のサイト インドネシア・Mount Gede.
http://www.dephut.go.id/INFORMASI/TN%20INDO-ENGLISH/tn_gedepangrango.htm
92. Shukor (Faculty of Science and Technology, Universiti Kebangsaan, Malaysia) 私信 (佐々木浩氏を介して)
93. 韓国のweb動物辞典.
<http://www.animald.com/list.php?ps=15&p=2865>
94. Аврорин, В.А., Лебедева, Е.П. 1978 Орочские Тексты и Словарь. НН наука: Ленинград (Leningrad), USSR
95. Shrestha, T. K. 1997 Mammals of Nepal: with Reference to Those of India, Bangladesh, Bhutan and Pakistan. Steven Simpson Natural History Books, Kathmandu, Nepal
96. Mitchell-Jones A. J., Amori G., Bogdanowicz W., Kryštufek B., Reijnders P. J. H., Spitzenberger F., Stubbe M., Thissen J. B. M., Vohralík V. and Zima J. 1992 The Atlas of European Mammals. Academic Press, San Diego
97. カザフ語版Wikipedia. <http://kk.wikipedia.org/w/>
98. Siivonen, L., Sulkava, S. 1994 Pohjolan nisäkkäät. Otavan Kirjapaino Oy: Helsinki, Finland
99. エルジャ語版Wikipedia. <http://myv.wikipedia.org/wiki/>
100. バスク語版Wikipedia. <http://eu.wikipedia.org/wiki/>
101. アラビア語のオンライン百科事典
http://www.moqatel.com/openshare/Behoth/Gography11/geography/sec206.doc_cvt.htm
102. イランの動物についてのサイト
<http://mohit-m.blogfa.com/post-58.aspx>
103. Firouz, E. 2005 The Complete Fauna of Iran. I.B. Tauris: New York
104. 松永緑彌 1995 『ブルガリア語辞典』 大学書林: 東京
105. サモギティア語版Wikipedia.
<http://bat-smg.wikipedia.org/wiki/>
106. ザーターフリジア語版Wikipedia.
<http://stq.wikipedia.org/wiki/>
107. スコットランド語版Wikipedia
<http://sco.wikipedia.org/wiki/>
108. ベネチア語版Wikipedia. <http://vec.wikipedia.org/wiki/>
109. ガリシア語版Wikipedia. <http://gl.wikipedia.org/wiki/>
110. アラゴン語版Wikipedia. <http://an.wikipedia.org/wiki/>
111. マン島語版Wikipedia. <http://gv.wikipedia.org/wiki/>
112. ウェールズ語版Wikipedia. <http://cy.wikipedia.org/wiki/>
113. Hatt, R. T. 1959 The mammals of Iraq. University of Michigan Museum of Zoology, Miscellaneous Publications 106:1-113
114. ヨルダンの野生動物保護の法律のサイト http://www.lob.gov.jo/ui/bylaws/search_no.jsp?no=43&year=2008
115. ヒンディー語のonline辞書1 <http://hi.w3dictionary.org/index.php?q=martes%20foina>
116. ヒンディー語のonline辞書2 <http://dict.hinkhoj.com/shabdkosh.php?lang=en&word=marten>
117. 西フリジア語版Wikipedia. <http://fy.wikipedia.org/wiki/>
118. リグリア語版Wikipedia. <http://lij.wikipedia.org/wiki/>
119. ワロン語版Wikipedia. <http://wa.wikipedia.org/wiki/>